

平成26年度 業務研究会報告書

小地域福祉活動の活性化から
社協の総合力を「見える化」する



はじめに

大阪府内の社協では、住民主体の原則のもと、地区福祉委員会（校区福祉委員会）を中心とした小地域福祉活動を社協事業の柱に据え、近年では小地域ネットワーク活動の推進を図ってまいりました。

しかし、これまで地域の福祉活動を担ってきた福祉委員や民生委員・児童委員、ボランティアの高齢化や担い手不足などが大きな課題となっており、「10年先の活動が見通せない」といった声も多く聞かれます。

また、地域でのつながりの希薄化やニート・ひきこもり、虐待への対応、孤立死の防止、認知症高齢者への支援・介護予防メニューの地域展開等、地域社会や福祉を取り巻く状況は刻々と変化しており、地域に期待される役割も年々増してきている状況です。

そこで、今年度は、これまで大阪で積み重ねてきた、小地域福祉活動の実績を振り返るとともに、10年後の地区福祉委員会のあるべき姿に想いを馳せ、組織構成や多様な主体との連携のあり方、そこへの社協ワーカーの関わりなど、今後の活性化に向けたヒントを探るべく、『業務研究会～小地域福祉活動の活性化から社協の総合力を「見える化」する～』を設置。12名の社協職員と2名のアドバイザーの協力のもと、検討を重ねてまいりました。

本報告書では、府内5つの地区福祉委員会へのヒアリングを通じて、地域性や地域が抱える課題別に、その実践の特徴とプロセス、社協ワーカーとしてのコミュニティワーク実践のポイントをわかりやすく示すことを意識して、まとめております。

今後の社協コミュニティワーカーとしての実践のヒントに、そして、これからの大阪府内での膨大なコミュニティワーク実践の『経験値』を蓄積する端緒となれば幸いです。

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会

目 次

○はじめに

1 業務研究会の取り組み概要

(1) 業務研究会の開催 (Ⅰ)	3
(2) 作業部会の開催	6
(3) 業務研究会の開催 (Ⅱ)	9
(4) 小地域活動計画づくりの効果的な実施に向けて (実践紹介)	
・熊取町社会福祉協議会	12
・吹田市社会福祉協議会	13
(5) 業務研究会の開催 (Ⅲ)	15

2 コミュニティワーク実践課題とコミュニティワーカーの対応

～「コミュニティワーク実践辞典」の試み～	16
----------------------------	----

3 ユニークな小地域実践の紹介 ～社協ワーカーの視点から～

(Ⅰ) 第1分類：集合住宅が多い地域から	36
(Ⅱ) 第2分類：高齢化が進行している地域から	42
(Ⅲ) 第3分類：農山村地域（町村部）から	48
(Ⅳ) 第4分類：住宅街で若い人口が増加している地域から	54
(Ⅴ) 第5分類：新旧混合の平均的な住宅地を中心とした地域から	60

4 まとめ これからの小地域福祉活動実践のために

業務研究会メンバーの思い ～振り返りにかえて～（第2回業務研究会より）	69
---	----

資料編

(1) 講義資料：これからの地域福祉と小地域活動（大阪府立大学 小野達也氏）...	74
(2) 平成26年度 業務研究会 実施要項	77
(3) 平成26年度 業務研究会 参加者名簿	79
(4) 小地域ネットワーク活動リーダー研修会：活動分析シート	81

1 業務研究会の取り組み概要

(1) 業務研究会の開催（Ⅰ）

第1回目の業務研究会の開催にあたっては、まず、参加メンバーの地域や担当エリアにおける、小地域福祉活動の現状や抱える課題についての共有化を図った。

ここ数年来、府内の地域組織担当職員や担当課長会議においても、地区福祉委員の担い手不足や高齢化・固定化、モチベーションの低下、活動メニューのマンネリ化、小地域ネットワーク活動の意義がどこまで伝わっているのか？など、『これから』の小地域福祉活動の展開に向けた不安や悩みが多く聞かれる中で、その現状を再確認する機会となった。

◆26年度の府内41市町村社協における重点事業（※26年度第1回地域担当課長会議より抜粋）

該当社協数	事業内容・テーマ
18社協	小地域ネットワーク活動の活性化（対象者の拡大／プログラムの開発 等）
14社協	地区福祉委員会の活性化（担い手の拡大／会員会費／コミュニティ協議会との関係 等）
16社協	地域福祉活動計画等の取り組み（策定作業、見直し作業、進捗管理 等）
20社協	災害時対応や減災・防災の取り組みの推進

＊小地域福祉活動の活性化にかかる事業を重点に掲げた社協がほとんど！！

課題意識の共有

◆地域における課題

- ・地区福祉委員、民生委員のなり手がいない。高齢化、固定化、モチベーションの低下。
- ・町内会への加入も減っている。
- ・同じ事業メニューを20年近く繰り返している。マンネリ化。
- ・小ネットの対象者が限定的（高齢者中心）などところが多い。
- ・サロン活動や小ネット活動の「意義」がどこまで伝わっているか。
- ・「まちづくり協議会」との棲み分けや連携。メンバーが地区福祉委員会役員と重複しており活動も似ているため、地域福祉活動を行政がやっている感じになってきている。
- ・山間部と都市部といった地域性による活動の格差をどう埋めるか。
- ・活動拠点確保の限界。

◆担当者の思い・課題意識

- ・小地域の福祉活動計画の策定や、点検・評価ができていないのか？（単年度の事業消化になっていないか、先を見据えた目標設定の視点が弱かったのではないかな…）
- ・地区福祉委員会として、地元での「協議する場」が必要。
- ・地域社会（住民の意識、世代間の意識ギャップ、地域性による違い、社会全体のつながりの希薄化、自治会未加入世帯の増加、そもそも交流を求めない住民の存在、等）の現状を踏まえて、地区福祉委員会の組織のあり方や活動のあり方も変化しなければいけないのではないかな？
- ・時代のニーズに合っていないから、「担い手不足」になり、「活動がマンネリ化」していると感じ

るのでは。

- ・ 地域の実態をもとに、地域で目指す理想の実現可能性をきちんと分析する必要がある。
- ・ 地区福祉委員会の活動はサービスの代替ではなく、制度でも対応しづらい身近な地域だからこそできる狭間の課題に取り組んできた。そこは大事にしないといけない。

 **改めて地区福祉委員会の役割が問われている！小ネットの原点の確認が必要！！**

今、地域で力を入れている取り組み

- ・ たまり場や居場所づくりに取り組んでいる
- ・ 地区福祉委員会等の活動拠点を作ることが活性化につながる
- ・ 買い物支援と小ネットを絡めた活動に力を入れている
- ・ 小学校への働きかけ
- ・ 子どもから大人まで視野に入れた福祉教育
- ・ 地区ごとの計画づくり
- ・ 団塊の世代をターゲットに担い手発掘を目的とした福祉講座
- ・ 地区福祉委員会、自治会と協力した若い世代（子育て世代など）への働きかけ など

◆小地域福祉活動の充実にに向けた各地域の取り組み（※H26地域担当職員会議より抜粋）

- ・ 地区福祉委員会の活動事例集の作成
- ・ 小地域活性化モデル事業（地域でやりたい事業に取り組んでもらう）
- ・ 施設（施設連絡会のメンバーでもある）の職員が福祉委員として参画
- ・ 対象を限定しない「ふれあい喫茶」の展開
- ・ コミュニティカフェを社協として実施。いずれ校区に広げたい。
- ・ 小ネット活動の一層の発展をめざした、校区と専門職、社協、行政が協働した支え合いの取り組み ※早期発見のための見守りや事例検討などを実施
- ・ 地域の課題抽出を兼ねて、現在3か年で地区ごとの行動計画を策定中
- ・ 発達障がいの子どものためのサロンを市内1地区で試験的に実施中
- ・ 個別の見守り活動（充実している）を補完するイメージで地域内にサロンを拡大
- ・ 孤立死を防ぐ、地区と施設の連携による鍵預かり事業の全市域実施
- ・ 1校区でモデル的に地区福祉委員会の構成組織のリニューアル（多様な団体の参画）を進行中

※こうした現状や課題、担当者の思いを
踏まえつつ、2025年問題を意識して…

**小地域福祉活動（小地域ネットワーク活動・地区福祉委員会）の活性化から
社協の総合力を“見える化”することを目指す！！**

◆業務研究会の経過

日 時	参加人数	主な内容
7月～	－	*メンバー募集期間
7月17日 (第1回)	14名	現状と課題の把握、共有 *自己紹介 *講義～これからの地域福祉と小地域活動 (大阪府立大学 小野達也氏) *活動の現状と課題意識の共有 *今後のスケジュールと進め方について
8月～	－	*地区福祉委員会の組織・活動の魅力を見える化する自薦・他薦シートの集約
9月24日 *作業部会	10名	*自薦、他薦シートからわかる特色や傾向の整理 *なぜ、その地区での活動がうまくいったのか?の確認 *特徴的な取り組みを行うヒアリング先の地区を検討 *報告書のまとめかたについての検討
10月2日 (第2回)	12名	地区の先駆的事例を集約 *作業部会の報告 ～地区福祉委員会の組織・活動の魅力を伝える工夫～ *小地域福祉活動の活性化に向けた組織のあり方について ～地区福祉委員会の未来(夢と現実)を語る～ *小地域福祉活動の先進事例等のまとめ作業について
12月16日 (第3回)	11名	小地域の計画づくりの意義・効果 *地区の小地域活動計画づくりについて(実践報告) ・熊取町社会福祉協議会 ・吹田市社会福祉協議会 *小地域福祉活動の先進事例等のまとめ作業について ・報告書作成のねらい、方針の共有 ・ヒアリング先の確認 など ・今後のスケジュールについて
1月～2月末	－	特徴的な活動を行う地区福祉委員会へのヒアリング
3月18日 (第4回)	11名	全体まとめ *報告書の作成について ・全体の構成について ・ヒアリング実施報告 *10年先を見据えた小地域ネット形成に向けた項目づくり ～振り返りを兼ねて～

(2) 作業部会の開催

地区福祉委員会の組織・活動の魅力（特色）を見える化するために、研究会メンバーの市町村および他市町村で、「この組織、活動はユニークだ！自慢できる！」という取り組みを募集。集約した情報をもとに、活動の特徴や傾向を整理するとともに、取り組みの工夫や地区の様子などを話し合う中で、ヒアリングをしてみたい地区福祉委員会の抽出や、報告書で事例を取り上げる際のまとめ方などについての意見交換を行った。

〈今回例示した特色〉

- | | |
|------------------------------|-------------------|
| ①活動がとにかくユニーク | ②活動日数・回数が多い |
| ③担い手・VO（ボランティア）が多い | ④高齢者以外の対象者が参加している |
| ⑤自由に使える活動拠点がある | ⑥調査活動から活動につながっている |
| ⑦専門職（CSWや地域包括等）と連携した活動を行っている | |
| ⑧委員会の組織構成がユニーク | ⑨NPOや協議会等を作っている |
| ⑩財源確保の工夫をしている | ⑪小地域活動計画がある |
| | ⑫その他 |

〈作業部会の進め方〉

➡ 自薦、他薦シートの特色の傾向分析（＝ワーカーとして着目している点）

- ・項目の数を整理
- ・全体として推薦のあがった活動の特徴は？
※どの項目が多い？（強み：意識が高い）⇔ 少ない？（弱み：意識が弱い？）
- ・お互いの軸を確認。これまで自分はどこに着目してきたか？弱い部分はどこなのか？これからはどこに着目していく必要があるのか？

➡ なぜうまくいったのか？どんな働きかけ（工夫）を地域でしてきたのか？

➡ 成功した、うまくいっているいくつかの地区にヒアリングに行こう！！

- ・どこに行く？（数か所をピックアップ）

➡ 聴く（ヒアリングの）ポイントをまとめる（＊出し合う）

- ・何を聴くか→何を聴いたら事例集に反映できるか？
（※ワーカーとして欲しい材料・情報はなにか？）
- ・ここ5～10年の地区の変化は？どんな工夫をしてきたのか？
（※経年変化から知る）

～作業部会で出された意見～

〈Aグループ〉

強み・着目しているポイント

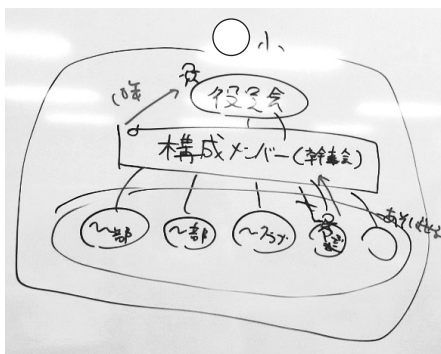
- ①活動のユニークさ ②日数や回数 ③担い手が多い
④高齢者以外の参加 ⑤自由に使える活動拠点がある ⑦専門職と連携した活動の実施

弱み・課題

- ⑥調査活動 ⑧委員会の組織構成 ⑨NPOや協議会
⑩財源確保の工夫 ⑪小地域活動計画

* 調査活動や小地域活動計画については、一部で実施しているところもあるが、現状では弱い部分であり、今後意識を高めていかなければならない。財源についてはもう少し工夫の余地あり。テーマ型のNPO等との連携は小地域活動においては難しく、組織構成についても工夫はなかなか困難。

〈Bグループ〉



*ある地区では役員会のもとに幹事会を組織し、さらにそのもとにメンバーが希望する複数テーマの部会を設置している。興味関心のあるテーマ部会への多様な住民の関わりが担い手の発掘・養成につながっている。また、そこから必要な事項は、役員会・幹事会へボトムアップで伝わる環境がある。

②活動日数・回数が多い、③担い手・VO（ボランティア）が多い、⑪小地域活動計画があることを強みとして挙げるメンバー、そこを課題とするメンバーがそれぞれいた。

⑥調査活動や⑪小地域活動計画づくりを進めていくにあたっては、ニーズ調査や地域診断（アセスメント）を実際どのようにしていくのか、あわせて報告することを考えた場合には、誰に「見せる」のか？がポイントで、その経過や結果（振り返りまで）を地域で共有するためにはどうすべきか？という点も課題として挙げられた。また、活動の「評価」のために、実践者・社協職員それぞれの視点からチャートを作成し取り組み状況を可視化してはどうか？という提案も出された。

＊作業部会での意見交換を経て、今後の小地域福祉活動の活性化に必要な要素として共通のキーワードとしてあげられたのは、やはり…

地域づくりは“人”づくり!!

◎そのためのしかけとして、地域は何ができるのか？

→人づくりのための工夫が必要!!

(例えば…)

- ・自由に使える活動拠点の確保
- ・小地域活動計画の策定
- ・調査活動の実施
- ・財源確保の工夫 など



～ユニークな活動を展開する地区へのヒアリングからその極意を学ぶ～

◆報告書のまとめ方について ～誰に、何を、見えるようにすればよいか？～

今回のゴールは…

①「小地域福祉活動の活性化」

- ＊10年後に地区福祉委員会が存在すること（組織の在り方／財源）
- ＊地区福祉委員会が元気に活動していること（担い手／方法／拠点）
- ＊地域のニーズに応えた活動が展開できていること
《地域の変化（住居、住まい方、家族構成、社会関係、移動手段、景気、仕事、…）／住民のとらえ方・変化／自治会等地縁組織、NPO等のテーマ型組織》×（様々な人の暮らしの困りごと）

②「活性化」には、「住民の理解と参加が不可欠」≡「見える化」

- ＊理解→参加→福祉文化の創造→さらなるニーズの発見→活動の必要性
- ＊参加者増→さらなるニーズの発見→活動の必要性→評価→財源確保

どんな報告書にしたい？

◆誰に：社協職員に向けて

◆何を見せる？

①実践者（地域）目線で

- ・地域がコミュニティをつくっていくプロセスが見えるように
- ・数値化できない住民の声を肌で感じることも大事
- ・ここ5年、10年でどう変化（工夫）してきたか？経年変化から知る

②社協職員目線で…

- ・社協ワーカーの動きや社協の役割が見える化する
- ・事前の地域診断、到達度や評価・分析のための指標が必要
- ・地域や社協に持ち帰って活かせるように、「フォーマット」（参考／評価軸）となるような事例集的なものを作成する。

(3) 業務研究会の開催（Ⅱ）

第2回業務研究会は、「～地区福祉委員会の未来（夢と現実）を語る～」をテーマに開催。地区福祉委員会の組織構成や、活動エリア、活動拠点、多様な主体との関わりなどを柱に、10年後、どんな地区福祉委員会であってほしいか、それぞれの想いと夢を語り合った。

～メンバーの声（一部紹介）～

どんな人に参加してほしいか？

- * 若い人はもちろんだが、地域に住んでいる人だけでなく、そこで働いている人も巻き込んだらいいんじゃないか？企業や施設の関係者は巻き込めるかも！？
 - * 地域に愛着のある人、理解のある人が活動できる地区福祉委員会にしたい。
- ➡ 核となる部分、委員会としての軸はしっかりと持ちながら、テーマや活動内容に応じて、柔軟性をもって参加メンバーの幅を広げていくことも大切。

なぜ新しい人が入りにくい？

- * 組織のしびりが強く、気軽に参加しにくい。
- * ゆるさがなく、ちょっとボランティアでも入りにくい。
- * 組織として新しい人を受け入れる体制ができていない。

どうあるべき？

- * 活動しやすい環境整備が必要。気軽さ、身近な場として存在し続けることも大事。
- * 組織の『しくみ』と『ヒト』の関係…『ヒト』が強すぎるとうまくいかない。このバランスが大事。
⇒ 『しくみ』を活かせる『ヒト』づくりが必要。
- * 地域のことをすべてわかっている人でなくてもいいのではないかな？
- * 既存の枠を超えていくために、問題発見の感度を高めていく必要がある。

『ヒト』と『しくみ』の整理

- * 地区福祉委員会において何を大切にするか？
⇒ 『価値』・『理念』を共有できる組織、実現できるしくみにしていく必要がある。



エリア

- * 地域に応じた範囲：小学校区／より小さい圏域で／幅を広げる
- * 100人に1人の委員を／人口1万人に1つの委員会

➡ 社協職員こそが圏域に縛られているのではないかな？

機能

- * 地域課題を自ら発見→共有化→協議（考える）→解決につなぐ

➡ 福祉委員会自体にコーディネートする機能があってもいいのではないかな？

しくみ

- * 入口の枠を広げる（視野を広げる）／ちょっと参加ができるように（自由）／柔軟性としなやかさを持つ

つながる

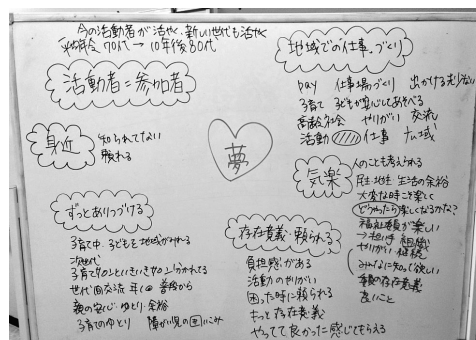
- * 企業、NPO、学校、事業所等の多様な団体を巻き込み、それぞれの強みを活かす
- * 自らつながれる組織を目指す
- * 新たな層の参画を促す（例えば…50代女性／60代男性／遊び心を持った人など）

主体性

- * 自ら気づき（必要性を感じる）、自ら考え、自ら動く／地区福祉委員会主導
- * 活動するエネルギーがわいてくる組織に（自発性⇔官僚制）
- * 必要性を感じてもらえる頼りになる組織に
- * 実践者がイキイキと楽しめて、「社会的役割」を感じられるように
- * ボランタリー×必要性
- * 住民による組織の再編集

市町村社協のスタンス

- * 道筋は社協職員が示していく／専門職としての側面的支援が重要
 - * 多様な団体と地区をつなぐコーディネーターの役割
- ➡ 地区のボランタリーな側面と社会的な側面を支えるのが社協の役割



活動を楽しく継続してもらうためには

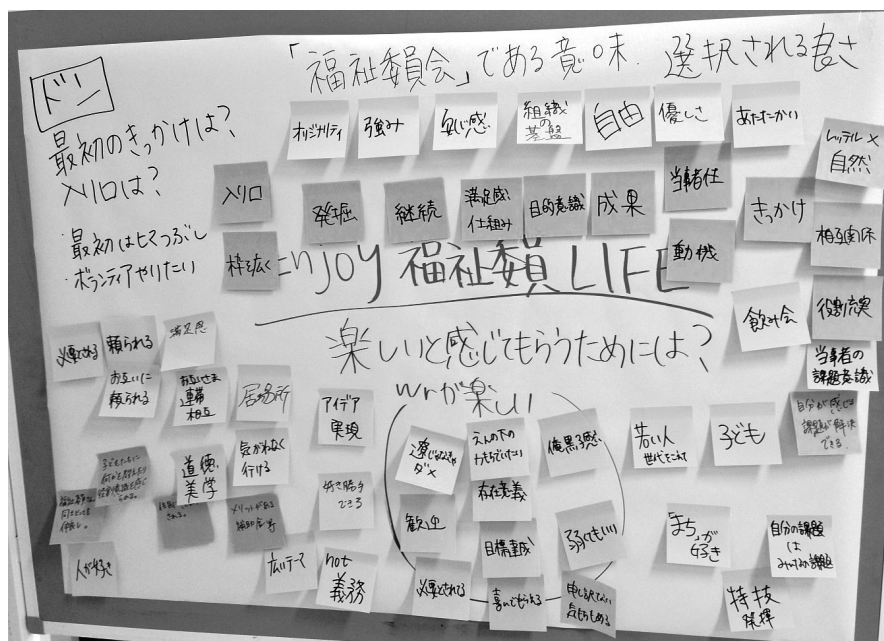
- * 福祉委員の活動を始めたきっかけは、人それぞれ。最初はヒマつぶしで活動を始めた人が10年以上続けて組織の中心になっていることもある。だからこそ、間口は広くないといけないのでは。ワーカーとしての理想は、普段から活動をしていたら、自然と福祉委員になったという流れ。

ワーカーが楽しいと思えることも大事

- * ワーカーのやりがいと福祉委員のやりがいは同じなのか？ワーカーとしては、地域にオリジナリティを発揮してほしい。あの地域だから出来る！とは言ってほしくない。地域の課題を福祉委員の課題として捉えられると、動機づけや目的意識が明確になり、自身の活動にもやりがいが出るのではないかと。目的意識や満足感を得られるようなしくみをつくる必要がある。

地区福祉委員会だからこそできること、本来の役割は何なのか？

- * 福祉委員さんには、優しさやあたたかさがある。地域の中で、おたがいさまの精神やおたがいに頼り頼られる関係性がある。支援者と参加者を区別しない組織を目指したい。区別しなければ、間口が広がり、もっと活動の幅が広がるのではないかと。



(4) 小地域活動計画づくりの効果的な実施に向けて（実践紹介）

熊取町社会福祉協議会

＊ 5つの小学校区福祉委員会と39の自治会単位の地区福祉委員会の活動を展開

◎小地域計画づくりの意義

- ①住民自身が地域の課題に気づき、めざす地域の姿を共有し、それに向かい具体的に何をすべきかを考えるきっかけをつくること
- ②地域福祉に関わる各種団体や活動者同士のつながりをつくること、強めること

◎実施のプロセス

策定委員、専門部員の選出

- ・ 策定委員→各校区より1名選出／専門部員→各校区2名選出（委員長から指名）

〈専門部会の役割〉

相談しながら二人で進めていけるように工夫

ボランティア連絡会や福祉委員会、地域貢献委員会で活動しているメンバー（15名）で構成

- ・ 地域の活動現場からの声を反映し、地域課題をこの場で議論・共有する
- ・ 専門部会で検討した結果を各現場に持ち帰り、活動につなげる

現状把握

- ・ 校区別ワークショップ、アンケート調査、各地区社会資源表の作成

課題抽出

- ・ 各校区福祉委員会による課題検討会議、専門部会による共通課題の抽出

目標設定・行動設定

- ・ 策定委員と専門部員、社協校区担当者による原案作成
- ・ 各校区福祉委員会により検討

◎地域への効果（変化）

①新規事業の立ち上げ、定番事業の見直し

- ・ 地域福祉への理解、参加者拡大
 - 福祉委員会による広報、地域の既存グループとのコラボレーションが実現
- ・ 防災での地域づくり→対象者の拡大（高齢者世帯から全世帯へ）
- ・ 役員不足、人材育成、リーダーの負担軽減→サポーター制度、部会制、事業担当制
- ・ 地区間の格差→地区事業から校区事業への移行

②地域で活動をすすめる人材の発掘、育成

- ＊ 策定に関わった人（策定委員・専門部員）が、今年度各校区の活動を推進
- ・ 新興地区の専門部員が若い役員を牽引し、高齢者だけでなく、子どもも楽しく参加できる行事に変化しつつある

- ・住民自身が自らの言葉で活動の意義を地域住民に呼びかける

③関係団体や活動者同士のネットワークづくり

- * お互いの活動への理解を深めるきっかけとなる
- ・地域貢献委員会が小地域活動や福祉課題に触れ、今後の活動が検討されている
- ・ボランティアが地域の福祉課題に理解を深め、新たな活動が検討されている

◎なぜ小地域活動編をつくったのか？

①小地域活動の推進のために何が必要か？ ⇒ 担い手づくり

「リーダーがメンバーを巻き込む」「活動をその意義とともに引き継ぐ」等地域の共通課題である担い手づくりのために、小地域福祉活動の必要性に疑問を感じる人、活動内容がわからない人等に、活動の意義やこれまでの経過を理解してもらえよう材料をつくりたい!!

小地域活動編の構成

- ・地域の特徴、校区福祉委員会のプロフィール
- ・第3次計画の取り組みのポイント、地域のいいところ、地域の課題
- ・第2次計画における校区の取り組み、過去の活動履歴

②その他効果への期待

- ・福祉委員の意識向上「自分たちでつくった自分たちの計画」
- ・他団体、他機関への小地域福祉活動の周知
- ・他校区、他地区福祉委員会の活動の情報源

吹田市社会福祉協議会

中長期の行動計画策定のプロセス

◎地域福祉活動計画（平成17年度～21年度）

* 市内33地区福祉委員会で、活動計画の地区版を5か年計画で策定

- ・業務分析（社協職員）、吹田市地域福祉実態調査（市民対象）の実施

* 地区懇談会の実施→地域住民、諸団体の声を聴く機会を設ける。

- ・現状把握、課題分析、目標設定、具体的対応方法の検討

夢や希望、5年後こんなまちであってほしい！をイメージしてもらう。
他地区の取り組みも刺激に！

* 中間年の19年度に地区懇談会を実施し、計画の進捗状況の振り返りを行った。

* 1次計画の総括、内部・外部評価の実施

地区福祉委員会委員長も参加しともに評価！

◎第2次地域福祉活動計画（平成22年度～26年度）

- * 地区懇談会：地域の福祉課題への理解促進、連携・協働のきっかけづくり
⇒吹田市職員、施設連絡会職員のオブザーバー参加

多様な団体を巻き込むしかけ。
この場を通じて、地元地区と施設連絡会の連携が生まれ、進んだ

- * 中間年の24年度に地区懇談会を実施（計画の進捗状況の振り返り）
中間見直し、内部・外部評価の実施

- * 2次計画の総括、内部・外部評価の実施

◎第3次地域福祉活動計画（平成27年度～31年度）

- * 地区福祉委員長を対象に講演を実施：「計画策定に取り組む意義・目的について」
- * 業務分析（社協職員）、吹田市地域福祉実態調査（市民対象）の実施
- * 地区懇談会の実施：地区ごとの計画策定の進捗状況により、グループワークや住民懇談会など、さまざまな形式をとった。

振り返りだけでなく、進んでいる地区は第3次計画の素案を発表。
社協としてサポートできることも示す。

***26年度は、さまざまな人・団体の声を「聴き倒す」を合言葉に計画策定！！**

- ①すいこれカフェ（吹田のこれからを考える意見交換会）の実施

テーマ：顔の見える関係づくり

ワールドカフェ方式で開催。呼びかけには広報誌も活用。
より多くの参加、多くの意見を聴くことを大切に。

- ②すいこれカフェ in 小中学校：大人だけでなく次世代を担う子どもたちの声を聴く機会を設ける

テーマ：こんなまちになったらいいな、どんなことができるかな？

①、②ともに地区福祉委員会も参加協力⇒地区計画に反映

◎計画の進捗管理について

- * 毎年度、計画の進捗状況や残課題などを振り返る ⇒ 事業計画に反映
- ・ 社協：半年ごとに振り返り
- ・ 地区：年度末に振り返り、小委員会を設けて進行管理、定例会で進捗状況を議論

計画を積み重ねる中で、市や施設連絡会、学校等、多様な主体を巻き込み、地域活動への主体的な関わりを促してきた。社協は地区懇談会の持ち方を工夫するなど黒子役に徹し、より地区福祉委員会の方々の主体性を活かせるようなサポートを心掛けた。

(5) 業務研究会の開催（Ⅲ）

＊第3回業務研究会では、前述の小地域活動計画づくりの効果的な実施に向けた実践報告とともに、小地域福祉活動の先進事例等、報告書のまとめ作業についての方針や方向性を決定した。

◎今回は社協ワーカー向けの報告書に！！

※事例集をもとに、地域での実践に活かしていただくことを狙いとする。

◎魅せ方！！

➡その①：援助過程（ワーカーとしてどう関わったのか？）を魅せる

- ・時間軸にそって関わりを見せる
- ・しかけ方（ワーカーの技術・実践のコツ）を見せる
- ・支援の裏側も可能な範囲で見せる
 - ※苦労、本音→からの「しかけ」のポイント
- ・成果（※社協の総合力）を見せる
- ・前回の業務研究会（H24）でのプロセスチャートをステップアップしたものを見せる

➡その②：地域が歩んできたプロセス・歴史を魅せる

- ・地域が動いた、「変化」したポイントを見せる
 - ※地域の再構築のポイント
- ・これまでの地域の歩みとこれからのイメージを見せる
- ・小地域福祉活動の歴史を見せる（コラム的に）
- ・続けていくためのコツを見せる

➡その③：地域活動の効果を魅せる

- ・続いていることへの評価を見せる
- ・事例の共通項を見せる
- ・社協ワーカーの視点から夢を語る（※取り上げた地区でできること・したいこと）

（その他）

※今回の報告書作成にあたって、地区名は出さない。

※地域類型（5類型）に応じてワーカーが活用できるようにする

- ・第1分類 集合住宅が多い地域
- ・第2分類 高齢化が進行している地域
- ・第3分類 農山村地域
- ・第4分類 住宅街で若い人口が増加している地域
- ・第5分類 新旧混合の平均的な住宅地を中心とした地域

（+ヒアリングで押えておきたいポイント）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">（Ⅰ）組織のあり方の工夫（Ⅱ）小地域活動計画など目標設定の方法や効果 |
|---|

2 コミュニティワーク実践課題とコミュニティワーカーの対応 ～「コミュニティワーク実践辞典」の試み～

「こんなときにどうしたらいいの?」「留意点は?」「ここに気をつけよう!」といったポイントを、業務研究会を通じたヒアリングや、業務研究会参加者の日ごろの実践・経験を踏まえて、分析しました。すべての「ハテナ」に一律に答えられる「正解」がないところが、コミュニティワーク・小地域福祉活動の醍醐味であり、難しさでもあります。

コミュニティワーカーとしての実践のヒントになるよう、そして、これから大阪府内での膨大なコミュニティワーク実践の「経験知」を蓄積する端緒になれば、との思いからまとめました。

さあ、あなたなら、どのようにアプローチしますか??

① 組織（地区福祉委員会）の立ち上げ支援

逆引き事例 例えば、39ページを見よう!

逆引きとは…

社協ワーカーが地域支援を行う中で抱える悩みや壁となるテーマについて、そのアプローチ方法、留意点のヒントを、実践事例からも得られるようにまとめたものです。

実践課題・テーマ

■地域で孤立死があった。昔は働き盛りの世代ばかりだと思っていたけど、気が付けば高齢者ばかり。「他人事ではないな…。なにか地域でしないと、自分の老後も不安…」といった声があがってきました。社協職員がそんな声をキャッチ。

さあ、あなたならどう支援する??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 「このタイミングしかない!」と、地域に積極的に集中的に赴き、課題意識を持っている住民らの話を聞き、ワーカーが引き合わせ、人間関係をつくる。
- ☐ 「ふれあいサロンをしては?」と、他地区（市内・市外問わず、その地域の規模や地域特性に似たところ）の活動を紹介する。
- ☐ （広く地域に困りごとを知ってもらうための）事例報告会を開催し、「あったらいいな」を一緒に考える。活動をおこすための組織づくりへつなげる。（事例→活動→組織）
- ☐ 第1回目のサロン開催まで、丁寧に準備を一緒に手伝う。有志のコアとなるメンバーの心をしっかりつなぎとめておく。さらに、じっくり活動を積み重ね、参加者が増え、定着してきた段階で、見守りの重要性を伝え、立ち上げへとつないでいく。

ここに気をつけよう!

- ☐ 結果を急ぐあまり、ワーカーが指示的態度をとり、主導権を握ってしまわないよう注意。主体はあくまでも地域住民であり、細かなことでも、その都度、住民の意向と決定を尊重し、住民の主体意識をひきだすことが大切。
- ☐ コアメンバーとの会議は、最低限何を決め、共有する場かを意識して行わないと会議の数だけが増えてしまうことも。
- ☐ アフターフォローを忘れずに!（例えば住民座談会の実施など）やってどうだったか、特にプラスの反応（サロンの参加者の「参加してよかった」の声など）を地域にフィードバックしていくこと。

- はじめから「完璧」な会じゃなくてOK！挑戦には失敗がつきもの！笑い飛ばす柔軟さを持とう。
- 過去の担当職員がすでに地域へアプローチしている場合もある。先人の教えも大切に。

＊すぐに「だから、地区福祉委員会をつくりましょう」はグッと我慢。具体的な活動の積み重ねから、福祉活動の必要性をコアメンバーに実感してもらうようにアプローチしよう。

② 自治会（地縁組織）ベースの地区福祉委員会の支援方法・留意点

逆引き事例 例えば、51ページを見よう！

実践課題・テーマ

- 自治会加入率が高いが、担い手は高齢化。行事への新興住宅の住民の参加は少なく、古くからの歴史や伝統を大事にしている地域。自治会や老人クラブ、地区福祉委員会などが一体的に各種事業、見守りをを行っている。社協ワーカーとしてどのように捉え、どんな支援を心がけていけばよいか？さあ、あなたならどうする？？

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- 社協は黒子役に徹する。例えば、地域にはない備品の貸出や、さまざまな団体へのつなぎ、他の地域の情報提供などで、サポートに徹し、「出会いの場」を演出する。
- 地域への愛着や地域の伝統・歴史を尊重する。そうした地域の強み、を活動につなげる。たとえば、「とんど」など昔から地域で伝わってきた行事、祭りなどを、福祉の活動と絡めたり、参加する方に福祉やまちづくりの視点（多様な住民の参加を呼びかける、招待する／子どもの参加を呼びかける⇒親世代の参加を期待する）を盛り込む。
- 「地域のことを教えて欲しい」というスタンスで介入する。地域の資源や困りごとを共有するプロセスの中で、住民の主体的な気付きを促す。統計や分析力など、社協と行政の連携の強みなどを見える化し、専門性に対する信頼を得る。

ここに気をつけよう！

- 自治会長だけへのアプローチではダメ。その他の人（副会長や班長、組長）とどうやって接点を持つかを意識しよう。あわせて、自治会ごとの選出ルールや引き継ぎの方法なども可能な範囲でつかんでおくとBEST！
- 古い地域であれば、ルールや風習が地域活動に大きく影響することがあるので、人間関係や地元の名士は把握する必要がある。
- 住民だけでは解決しにくい福祉的課題が起こった際には専門職として社協ワーカーを活用してもらえよう、ワーカーの存在を浸透させていく働きかけも大事。（例えば、地域の中で相談窓口の拠点を作るなど）
- これまで住民が継続して行ってきた活動に足りない部分が見えても、まず、継続してきた活動の実績を社協職員として褒めよう。そして住民リーダーが社協職員の意見を受け入れるようになるまで、「ゆっくり待とう」！

③ 活動メニュー・回数が多いのはなぜ？（立ち上げの方法）

逆引き事例

例えば、39ページを見よう！

実践課題・テーマ

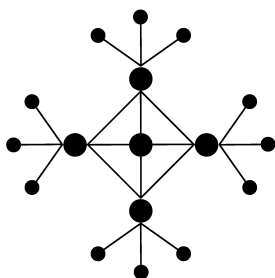
- 高齢者も多い、言葉や文化の壁がある外国籍住民も多い。いろいろ地域課題があるなかで、比較的短い期間（数年）のうちに、サロンや食事会、フリーマーケット、趣味活動、学習会、子育て支援など、多様な住民の参加や地域でのつながりを広げたい。
さて、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 地域の特性を活かす。公営の集合住宅などでは、棟ごとに昔ながらのまとまり、つながりといった意識が根強く残っている。いい意味での「おせっかい」の部分、ワーカーとしてはどう引き出すかがポイント。
- ☐ そこで暮らす住民の身近なテーマ、生活に役立つテーマでの学びの場づくりが活動につながる。ワーカーはその場をつくるアドバイス（新鮮なネタ等）を届けることが大事。
- ☐ その地域の良さを他地域へ発信する（社協だより、交流会の開催など）。発信することで、他地域からの意見をその地域が受ける。社協がかかわるよりも、地域同士が交流し、相乗効果を狙う。
- ☐ 活動資金を得るために、各種助成金情報を提供し、申請手続きまでしっかり支援する。
- ☐ 住民のニーズをキャッチするための住民向けアンケートの実施などを提案し、掘り起こしたニーズにそったメニューを開発するなど、専門職としての助言をする。
- ☐ 生活場面でのニーズに対応する。自治会会報を多言語で作成など。生活していくうえで必要な情報を伝えるツールづくりをとおして地域の連帯感を高めていく。

ここに気をつけよう！

- ☐ 地区福祉委員会の役員が「無理なくできる範囲でやる」という意識を共有できるように、その考え方を応援しよう。
- ☐ 活動を広げなければ、リーダーを増やしていこう。
➡「スノーフレイク・リーダーシップ」：雪の結晶のように各活動のリーダーを増やしていく手法。



（ハーバード大学、マーシャル・ガンツ氏の文献引用）

4 新旧住民の間でどうも壁がある…。

逆引き事例

例えば、45ページ、57ページを見よう！

実践課題・テーマ

- 地域には長い歴史がある。最近では高層マンション群が開発されたり。昔ながらの農家や自営業の商店、街のはずれにある大型店舗…小学校区といえども、なかなかまとまりがなくなってきた。そんな地域で「まちづくり」ってどうすれば。
さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ ワーカーとしてはジタバタしない。様子を見守りつつ、地区福祉委員会の役員体制が交代するタイミングが、新旧住民のメンバーが幅広く参画できるチャンス。新たな担い手（PTAの役員など地域活動に関心がある女性など）の目星をつけて、ひとりずつ口説く。
- ☐ 加入率が低くなっている、自治会の力、組織力を尊重する。自治会に協力を仰ぎ（趣旨説明に赴き）、ボランティア募集の回覧を回してもらう。（⇒自治会の活性化にもつながるかもしれない）
- ☐ 「地区福祉活動計画づくり」をきっかけに、地域の幅広い団体に参画してもらう。そこでワークショップ開催を働きかけ、「まちのいいところ、困っているところ」を出し合ってもらい、新旧住民ともに共通の課題や希望を確認し、新しい活動につなげていくことで、徐々に溝を埋めていく。
- ☐ 「防災減災」「子育て」など新旧住民の共通課題になりそうなものをテーマにイベント（研修会、まつりなど）を考えていく。
- ☐ 高層マンションの管理組合などに働きかけ、マンション住民の課題を掘り起こす。集会室などを活用し、住民にとって興味のある出前講座の開催を促す。回覧板や掲示板に地域行事の案内を継続して周知してもらうような働きかけをする。
- ☐ マンション単位での見守り、居場所づくりを進めていく。時期が来たらその見守りの組織同士の交流会など新旧間の交流を図っていく。

ここに気をつけよう！

- ☐ 新旧の壁を無理に壊さない。「まとまる」必要性について吟味すること。
- ☐ 互いにまとまるwin-winの部分を社協がコーディネートする意識を持つ。

5 地区福祉委員会に、新しい人が入りづらいのでは？

逆引き事例

例えば、51ページ、58ページを見よう！

実践課題・テーマ

- 熱心なリーダーが長い間地域の活動をひっぱってきてくれている。とてもありがたいことだし、小地域福祉活動は定着してきている。でも、あと10年、20年とリーダーをお願いすることはできそうもない。遠慮して入りづらい、意見しづらいこともあるのでは…
さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- 新たな担い手（PTAの役員など地域活動に関心がある女性など）の目星をつけて、ひとりずつ説得していく。
- 社協としては、地区福祉委員会のメンバーが固定化して長く続けてくれていることを、魅力のある地域、リーダーたちということで評価する一方で、「あとから参加している人（自治会から交代で役が回ってきた人なども含め）が、意見を出しにくいんじゃないかな」といった側面も配慮しておく。具体的に何ができる訳ではなくても、気にかけておく、そっとそうしたことを伝える、というスタンスだけでも大事なのでは？
- 新メンバーならではの特技を活かした活動を担ってもらい、旧メンバーには新しい感覚を刺激し、役割のすみわけを考えてもらう。（例：行事案内のチラシ作成など）
- 人と人ではなく、団体間の交流から始める。これまで参画していなかった団体（NPOや子育てサークル、社会福祉法人等）と交流を深めることで、人材の広がり良さを体感してもらう。
- 社協広報、地区福祉委員会各広報、市広報を活用しながら、特定の地区ではなく、広く福祉委員の募集をかける。社協が仲介することで新しい人に入ってもらうことで、リーダーの思いを尊重しながら次世代育成の方向を促す。
- 1年や2年ほどで交代していく方（自治会役員やPTAの方など）を個別的にとどめられるよう、残ってもらうための居場所やしくみを意識的につくっていく。（例えば、子育てサロンにだけ手伝いに来てもらう、ご近所のAさんの見守りだけをお願いする。OB会をつくるなど）

ここに気をつけよう！

- 会議の場面の場づくりに注目。リーダーをお願いして、会議のしかたに一工夫を！（フリップディスカッションなどの活用）参加者の意見が出しやすいような環境を整えよう。
- 地区の地域福祉活動計画は、策定方法によって次世代リーダー探し＆交代にも貢献できる。

6 「活動が活動を生み出す」その生み出し方や見立ては？

逆引き事例

例えば、51ページ、57ページを見よう！

実践課題・テーマ

■地域での取り組みを振り返ってみると、活動が活動を生み出していると実感することも。1つずつコツコツやっているうちに誰かが「こんなニーズ」「こんなことしたい」と次の活動を作り出すのか。それとも、ワーカーや地域のリーダーの見立てがあつてのことなのか。地域のニーズに応える活動を生み出す、無理なく育てるには？

さあ、あなたならどうする？

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 「最初の声」（こんな活動があつたらいいな）を大事にする。
- ☐ つぶやきをキャッチし、日をあけずに少しでもレスポンスを出す。少しずつ、情報発信や意見交換をし、その声がとぎれないようにする。
- ☐ つぶやきを拡散するため、地域の集まりなどで、提案してもらう。
- ☐ 地域で困っていること（畑をする人が不足）と地域で大事にしたいこと（伝統を守る／子どもらに伝えたい）をつなげる。
- ☐ あとで振り返れば次々に生み出されるようでも、じっくり1年、2年と活動を継続した効果とも言える。無理せずにコツコツ続ける中で、地域の中から「次が楽しみ」「続けてほしい」という声が出るのを待つ。そしてその声を拾い、活動している方やリーダーに広げる。
- ☐ ボランティアを丁寧に増やすことが、活動を活性化、生み出すことにつながる。ボランティアを増やすには子どもとまずはつながることが大事。そして、ボランティアひとりひとりが、それぞれに役割をもつことで、課題意識や次への意欲が育てられていく！
- ☐ 活動場所の確保や講師の紹介、派遣などで後方支援をする。
- ☐ 「こんなことしたい」につながる人との出会いをつくる。人と人をつなげる。
- ☐ 類似の活動をしている地域へ一緒に見学へ行く。

ここに気をつけよう！

- ☐ “must” の感情をできるだけ出さないことを意識！「～しなければいけない」ではなく「～したい」と思える意識づくり。楽しさ、活動対象者の喜びの声などフィードバック！
- ☐ こまめな活動の見学と、見学する際に丁寧に声をひろうこと。活動者、利用者双方からまんべんなく聴くこと。どちらかの意見にひっぱられたり、押しつけにならないように注意する。
- ☐ ワーカーは、地域の方々よりちょっとだけ先のこと、ちょっとだけ別の視点を考えておくことが大事。
- ☐ 時には、これまでの活動に新事業のヒントがなかったかを振り返ることも忘れずに。

7

地域の主体性をどう捉える??どう関わるか??

逆引き事例

例えば、51ページ、63ページ、64ページを見よう！

実践課題・テーマ

■元気なリーダーが活動をひっぱる、昔から地域のメンバーが自分たちの課題と受け止めて主体的に活動している。小地域福祉活動では理想的な展開。でも、社協ワーカーは「地域の主体性を尊重する」ということで、ただただじっと見守っておけばよいの?「地域の主体性」をどう捉え、どのように関わったらよいの?

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方(例)

- ☐ 地域の主体的活動を尊重しつつ、住民だけでは解決できにくい課題に遭遇したときに専門職として助言できるようにしておく。
- ☐ ワーカーとしての考えは正直に伝えてもよい。でも、伝え方が大事!「~だと思うけどどう思われますか?」「~さんだったら感じますか?」など、ワーカーの考えを地域が課題を考えるきっかけにしていく。
- ☐ 活動者の負担になっていないか、次世代の活動者が育っているか、足りないことややりづらいことがあり、サポートを必要としているか、など課題に注意する。特に無ければ、また、解決の方法が現状を崩すようであれば、見守ることも必要。ほどよい距離感、何かあれば頼ってほしい、というスタンス。見守る場合でも、しっかりつながっておくことが大切。常に情報を伝えるなど、丁寧に関わり、信頼を得ておく必要がある。
- ☐ 他地域へも発信し、主体性の波及を狙う。
- ☐ 地域の困りごとをどんどん発信し、レベルアップを図る。
- ☐ リーダーに「一緒に頑張りましょう」と伝え続け、苦手なところをお手伝いする。
- ☐ この活動の楽しみが何なのか、長くやっている人に話を聞く。出会いを演出する。
- ☐ 活動の振り返り、評価の場を大切にする。

ここに気をつけよう!

- ☐ 「主体性を尊重する」ことは何もせず見守ることとは違う。「褒める」「気にかける」ことも大事な主体形成の支援の1つと捉えてみては。
- ☐ 「理想」に終わりはない。活動は、良い面もあれば悪い面も必ずある。ワーカーは、現状に満足せず、悪い面もしっかり把握をしたうえで見守ることが必要。

8 小学校との連携

逆引き事例

例えば、51ページを見よう！

実践課題・テーマ

■最近では学校の授業で、人権や障がい理解、福祉、ボランティアについて学ぶ機会も増えてきている。街の未来は、いま地域で育っている子どもたちの10年後、20年後の話。いまから福祉について、自分たちが暮らす街について関心を持ち、理解してもらう。そして、その親世代にも関心、参加を促すことが福祉活動の活性化につながる。

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ PTAや子ども会の役員など地域活動に関心がある女性などの目星をつけて、ひとりずつ説得していく。
- ☐ 子どもを含めた行事の企画、活動づくりを常に意識する。
- ☐ 学校の先生に、説明に行き、話をする機会を増やす。学校の先生と地域の方とが意見交換する場づくりを後押しする。
- ☐ 学校の中ではなく、地域の中で福祉教育を行う。座学ではなく、地域の施設での交流イベントや、共生型サロンなど、自然な形で身に付くよう仕掛ける。
- ☐ 福祉教育で体験学習した学びの成果を発表する場を用意する。
- ☐ 学習に協力をしてくれるボランティアグループなどとのつなぎ役をする。
- ☐ 当事者の気持ちを分かってもらう。車いす体験でも実際に車いすにのっている人の参加を促す。当日の企画は先生とできれば保護者も参加すればなおよい。（一緒に子育てする意識）

ここに気をつけよう！

- ☐ 立場や年齢、感じ方がまったく違う層の人間同士の集まりは、本当に細かなところまで配慮が必要。配慮に欠けると、参加しなければ良かった、とか、恥をかいた、とか、せっかくの場がマイナスになり、今後をつぶしてしまう可能性が大きい。そのため、事前の打ち合わせや、事業の目的・目標の共有（参加するすべての人にとっての）を丁寧に行う必要がある。（劇、漫才、歌など楽しく学ぶ工夫を！）



9 地区福祉活動計画づくり

逆引き事例

例えば、45ページを見よう！

実践課題・テーマ

- 市町村社協で作成する「地域福祉活動計画」。概ね小学校区エリアで、小地域の福祉活動計画づくりの動きも広がってきている。小地域での地区福祉活動計画づくりを通じて、どのような街づくり、つながりづくりを目指すか？作り方や計画づくりを通じた狙い、ポイントなどは？
さあ、あなたならどうする？？

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 普段、なかなかうまく連携ができていなかった地域内の諸団体にも広く呼びかけ、幅広い参加を促す。例えば、地区福祉委員会、コミュニティ協議会、自治会、民生委員・児童委員（民児協）、老人会、PTA、子ども会、NPO、福祉施設、小学校、当事者（介護者家族、障がいのある子の親、ひとり暮らし高齢者）などに声掛けし、委員参画してもらう。
- ☐ 小学校区エリアで、「井戸端会議」（ワークショップ）を開催企画し、街のよいところや困っていること、などについて話し合いをしてもらう。話し合いの運営には、KJ法やワールドカフェなど、意見を出しやすい方法を採用する。
- ☐ 井戸端会議で拾った声を大事にする。有志でつながり、できること（≡次の集まり、など）を提案する。
- ☐ 「この街をよくしたい」という共通の想いをベースに、「防災」や「防犯」など、大多数の人が共感しやすいわかりやすいテーマ（≡連携しやすい、話し合いしやすいテーマ）を用意し、普段はあまり接点のなかった団体同士にも、話をする機会が生まれるように配慮する。
- ☐ 周知の仕方にも力をいれる。地域広報、ホームページなどなど。一般の住民にも知ってもらってなんぼ。
- ☐ これまで関わりの薄い層（例えば、中学校や成人したばかりの20代など）への参加を働きかける。

ここに気をつけよう！

- ☐ 策定後に確実に実行するには、年に1回の進捗管理が大切！
- ☐ 3段階のプロセスを意識する。
- ①各校区の地域調査票（アセスメントシート）の策定、②個別事例から学ぶワークノート（事例集をもとに、地域であつたらいいなのしくみを考えてもらう）③懇談（①②を踏まえ、5年後、10年後を見据えたビジョンを立てる）
- ☐ 地域の社会福祉法人、当事者、地域包括支援センター、行政との協働。3段階のプロセスにかかわってもらい、各地域レベルでの横のつながりをつくる。
- ☐ 『地域福祉の活動』と言われても、住民にとっては非常に抽象的でわからない。各年代、各団体にイメージしてもらえそうな言葉を選ぶことも大事。

10

外（地域外、さまざまな団体）からの力を受け入れる

逆引き事例

例えば、40ページを見よう！

実践課題・テーマ

■「地域のことは地域で」といった意識が強い地域もある。活動も熱心だが、最近では「自分たち（リーダー）もいい年齢になってきたし、10年と言わず、5年先も心配になってきた」との声も聞かれるように。小学校区等の区域も境目あたりに住んでいれば、隣の校区の活動拠点（コミセン、等）のほうが便利な場合もある…

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 地区によっては担い手の人数や課題を抱えた要援護者の人数もばらつきがある。すべてを地区内で完結しようとせず、近隣の地区とも相互に参加できるような関係をつくる。そのためには、近隣地区と一緒に会議する機会（小地域ネットワーク会議、等）を活用する。
- ☐ 社協や地域包括支援センター、CSWなどさまざまな専門職が関わり、地域内外の社会資源の情報を提供し、力を貸してくれる団体が身近な地域にあることを知ってもらう。また、各種団体等とつながるまでのプロセスにきちんと立ち会う。（情報だけ紹介して、地域任せにしない）
- ☐ 自分の地域でできないことは他の助け（NPO、行政など）を促す。それを地域が行えるようにワーカーは手助け。「うちでは無理や」で終わりではなく、「うちでは無理やけど、よそならいけるで！頼んでみよう！」“コーディネート能力を”高めていければ！
- ☐ 校区の良さを伝えつつも、校区にはこだわらない。必要に応じて、隣の校区とも連携する。
※子育て支援の場合は、小地域よりも中学校区圏域レベルでの支援者協働をする。資源がない地域は、校区をまたがって社会福祉法人に協力してもらうことも検討。

ここに気をつけよう！

- ☐ 例えば、地域のサロンに隣の地区から参加者が来る場合、活動者ならありがたく来てもらうといった雰囲気になることは多いが、参加者として来る場合は受け入れに意見が対立することもある。地域のサロンなので、「他地区の参加者が全体の3分の1まで」等のルールを事前に決めておくことも一つの方法。

11

福祉施設と地区福祉委員会のかかわりの重要性？

逆引き事例

特定の事例・事象は想定しません

実践課題・テーマ

- 地域には福祉施設がたくさんある。府内の多くの市町村社協では「地域貢献委員会（福祉施設連絡会）」が設立され、福祉施設と地域（地区福祉委員会や民生委員・児童委員）との交流も生まれてきている。地区福祉委員会と福祉施設、地域でどのようなつながり、関わりを支援すれば…さあ、あなたならどうする？

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- 市町村内にある福祉施設との連携が地区福祉委員会の「担い手の確保」につながるのでは？福祉施設と地区福祉委員会が一緒に行動（≡例えば、防災の取り組み、サロン等のグループ援助活動、など）することで、福祉施設を利用している方（本人、家族、施設のボランティア、他）に知ってもらうきっかけになる。一緒に何かの活動を行うことで、地域活動への理解も深まり、担い手確保につながるのではないかな？
- 施設のキーパーソンとつながることが大事。施設からのボランティア依頼などをきっかけに！
- それぞれの「強み」で具体的につながるツールが協働のカギになる！（災害時の協定例：日中人がいない「地域」と夜間人がいない「施設」は、要援護者支援で協力しあえる）
- 福祉施設の機能・意義を理解し、活かす。
 - （例）・施設の箱ものとしての意義：災害時の避難や交流の拠点としての機能
 - ・施設の専門性としての意義：認知症や精神障がい者と地域住民の摩擦。身近な相談窓口としての機能。また福祉教育（地域の防災訓練で、福祉施設職員が車イスの講座をする）
 - ・施設ができる出前講座を地域に情報提供
 - サロン拠点確保のため、施設の空きスペースを貸与いただく など。

* 福祉施設に住民が行くだけでなく、福祉施設の職員が地域のサロンなどに出向くことは、地域・施設双方のやり取りが活発になり、両者の良さを引き出すことにつながる。

ここに気をつけよう！

- 地域で当事者理解促進の事業や研修会を行い、地盤を固めておくことで、地域移行もスムーズに行える。地域の福祉力の底上げはワーカーの大切な仕事。ただ、地域住民の声も大切にする。地域福祉という視点をもたない人々にも、わかりやすく必要性を感じやすい促しがカギ。地域移行に関して言えば、一方的に支援者の立場だけで考えるのではなく、素朴な疑問や、その地域に住む人の感覚を意識することも大切。
- 施設側の意義として、地域との交流が施設内ボランティアの増加のみであるならば、地域の負担が増えるだけになる。

12

活動拠点の意味、効果?? ない場合はどう工夫する??

逆引き事例

例えば39ページ、58ページを見よう!!

実践課題・テーマ

- 地域に活動拠点ができることで、地域活動が活性化しているところが多く存在する。活動拠点にはどんな意味・効果があるのか??活動拠点をつくるためにワーカーが果たす役割は?また、活動拠点がなかなか整備できない場合には、どのような工夫をしたらよいのか。
さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方(例)

- ☐活動拠点ができることで、旧住民エリアと比較的新規の住民エリアとのそれぞれの住民が一緒に利用するようになり、お互いに知り合うことで住民同士の溝が埋まってきている。活動拠点には、地域情報の集積の場として、さらには住民をつなぐ効果もある。
- ☐活動拠がない時代は、食事会ひとつするにしても、参加しづらく(移動手段や距離の問題)、定期開催ができなかった。活動拠点が整備されたことで、地区福祉委員会の活動を定期的に、安定的に開催できるようになった。
- ☐行政やコミュニティ関係者に、福祉活動拠点の必要性を訴える!!
例えば、拠点活用による、孤立防止・福祉課題の早期発見、住民の役割創出などの効果をしっかりと伝えていく。

ここに気をつけよう!

- ☐福祉委員会以外の補助金の活用も考慮。拠点の整備に役立つものもある。
- ☐実は「どこでも」活動拠点になりうる可能性を秘めている。(喫茶店、ファーストフード店、公園、学校、施設、空き家…)
- ☐拠点をすでに整備している組織の効果や活用例の情報を集めることも大事。一方で拠点の活動が根付くことで、他の団体や参加者からの印象として、敷居が高くないように注意が必要。



逆引き事例

特定の事例・事象は想定しません

実践課題・テーマ

■地域では熱心に活動してくれている団体がたくさんある。熱い思いをもったリーダー。それぞれの活動はとても活発。でも、思いが強いが故か、団体と団体という部分ではうまく折り合えないような場面もある。どうも仲が悪い。もっとうまく一緒に連携できたら、役割分担もできるのに。

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 「連携しましょう」といっても、こじれた関係は修復できない。地区福祉活動計画という舞台、ツールを活用し、1対1の関係ではなく、たくさんの団体と一緒に考える場を設けることで、直接的な対立の場面を薄める。
- ☐ 共通の目標（街をよくしたい）で、折り合いやすいテーマ（防犯や防災など）で話し合いのテーブルをつくる。
- ☐ 特定の団体間のつなぎ、を想定せず、「多様な立場の人、いろいろな世代の人が自由に話し合える場づくり」を提唱し、そこに自然と関係がこじれた団体も一緒に入ってもらえるように舞台を整える。
- ☐ 個人的な感情の軋轢は思い切って“思考の外”に！地域課題をみつけて一緒にかかわっていくしくみをつくっていく。
- ☐ 共通目的をもってもらうこと、そのために、どのような役割分担が必要で、お互いにできるところとできないことがあることを理解してもらう。できないところを補い合うことでお互いの存在意義を確認してもらえ時間を設ける。なにより話し合いが大事。

ここに気をつけよう！

- ☐ 社協が入れない一線を無理には越えない。これまでの背景や、それぞれの思いはしっかりと把握しながらも、そこはクールに。同調共感せず、受け止める。
- ☐ 団体として仲が悪くても、団体の構成を地域で分けた時、同じ地区同士の人はどうなのか？そこを見極め、個人同士の関係が悪くないのであれば、モデル的に見守りやサロンなど連携の一つの形を示していくのも方法の一つ。
- ☐ 活動に支障をきたす場合は場の設定を。感情論ではなく、活動のために話し合う場をつくること。

14

高齢者も担い手に（アクティブシニアの可能性）??

逆引き事例

例えば、40ページを見よう！

実践課題・テーマ

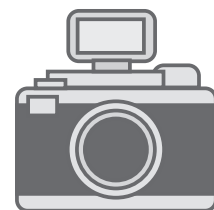
- 何十年も地域のために頑張ってきたボランティア。気が付けば自分も高齢者。次世代の育成や担い手の確保がやたらと話題になるが、まだまだ我々は元気。若い人の参加も広げつつも、元気な高齢者だってもっと活躍できるまちづくりを考えなければ…

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 高齢であることをマイナスイメージでばかり捉えない。年齢が近い方が、自分たちよりもっと年配の単身高齢者にとっては馴染みやすい、お互いに分かり合えるというメリットもある！
- ☐ 支援する・される、の関係ではなく、『お互い様の関係づくり』をすすめる。
- ☐ 元気であれば高齢者でも隣近所の見守りはできる。
- ☐ 「役割づくり」が大切。伝え方が大事で「I（アイ）メッセージ」を駆使。「私はあなたを必要としています」というメッセージを送る。（送り続ける）
- ☐ それぞれが役割を発揮していることを見える化する。活動の見える化は多いが、頑張っている人の見える化がまだまだ…。いくつになってもほめられたい!!
- ☐ これまでの経験や趣味、特技をサークル活動として具体化し、日頃のサロンやイベントで活かせるようにマッチングしていく。

※例えば、カメラ好きの人で同好会を結成し校区のカメラマンに！広報活動で活躍!!



逆引き事例

特定の事例・事象は想定しません

実践課題・テーマ

■地域だけで解決できないテーマ（活動スタートのための資金、車両、参加しやすくするための少し規模の大きい改修工事、…）について、行政にどのように働きかけ、アプローチすればよいのか？

さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 日頃からのコミュニケーション。地域の良い話をまめに小出しにする。
- ☐ 綿密な計画。想いだけでは届かない。課題の把握、予算や効果、数年後の見通し、人材の確保等、地域と協働でおこなう。
- ☐ 地道に続けてきた活動の中から拾った住民の生の声を行政に届ける。
- ☐ 会議の場面では行政にも参加依頼。現場の地域の意見も聞いてもらう。
- ☐ 「地域福祉計画・地域福祉活動計画」策定は、住民の声を届ける、良いきっかけになる！
- ☐ 地区福祉委員会だけの問題にせず、広く他団体、関係者を巻き込んだ『地域全体の問題』として提示していく。

ここに気をつけよう！

- ☐ 行政に要望ばかりするのではなく、地域でできることを行うことで「折り合い」を探すことも大切。
- ☐ 行政職員を動かすには首長（市長）！地域福祉活動について事あるごとに市長・議員にPRしておこう！地元の名士などを巻き込むことも効果あり。
- ☐ 話をするときは、行政に顔がきく人と一緒に声を届けに行く。（時には社協と一緒にいかない方がよいことも!?)
- ☐ 社協内部においても、地域担当だけでなく、管理職に地区の実情を積極的に知ってもらい、一緒に働きかけをしてもらう。

逆引き事例

例えば、57ページを見よう！

実践課題・テーマ

- タワーマンションや大規模マンション群など、オートロックで入ることすらままならない場合もある。自治会には未加入である場合も多く、管理組合等がどの程度マンション住民の福祉課題を把握しているかもわからない。まだまだ、こうした都市型の地域が増えていきそう。さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 大規模・高層マンションには比較的若い世代が多く引っ越してくる傾向がある。子ども（小学校、PTAなど）を通じて、子どもやその親世代とかかわり、接点を持つようにする。
- ☐ マンションには、バリアフリー化されてない古い持ち家から移り住んでいる（近くに子どもの家があるから、バリアフリー化されているから、等理由はさまざま）高齢者世帯がいること、馴染みのない地域（マンション）で孤立感を深めているかもしれないこと、に思いをはせる。
- ☐ 課題点をどうみつけるか。例えば「孤立死」は大型マンションでも起こりうる。まずは管理組合・管理者をまきこみながら、マンション内の課題などをテーマにした活動と一緒に考える。例えば、共有スペースを活用した講座・イベントの開催など。
- ☐ 住民にアンケートをポスティングする。まずはニーズ調査。その後、協力者を見つけ出し、アンケート結果とともに交渉。
- ☐ オートロックであっても、郵便局や配送業者など様々な地域の事業所が訪問することをふまえ、そうした事業所との連携によるアプローチでニーズ把握を行う。

ここに気をつけよう！

- ☐ 意外に、社協職員・行政職員がマンション居住者である場合も。ステークホルダー[※]を「地域で出会う住民」にのみ限定しないで！

※ステークホルダー：利害関係を有する者。利害関係者。



逆引き事例

特定の事例・事象は想定しません

実践課題・テーマ

- 地域でサロンはきめ細かく開催されるようになってきたけど、どうしても参加者が固定化してきてしまう。参加している人は比較的元気な方々で、予防とつながりづくりには効果があるが、「本当に気がかりな人が参加しづらい」…気づいてはいるんだけど…
さあ、あなたならどうする??

ワーカーとしての対応や考え方（例）

- ☐ 毎回サロンの様子を手紙や口頭で伝えるに行く。
- ☐ まずはニーズキャッチから。サロンに行けないのか行かないのか。何に困っているのか。何を求めているのか。
- ☐ 参加しづらいのが物理的な環境要因なのであれば、これまでとは違う拠点探しを行う。
- ☐ テーマや参加者をあえて限定した新たなプログラムづくりを行う。
- ☐ 「参加しづらいなら、その人の家の近所まで行こう」という逆転の発想で、本当に気がかりな人が楽しめる「訪問型／出前」サロンを実施する。
- ☐ 思い切って「家からでていくこと」に固執しない！他者とのかかわりを苦に感じる人もいる。個別支援の見守りなどで対応していく。
- ☐ そもそも、サロンは地域福祉活動の一部であり、すべてのニーズの受け入れ場所ではない。来られない人を民生委員の訪問対象にしてもらうなど、「みんな」で見守ろう。

ここに気をつけよう！

- ☐ 本当に気がかりな人が参加できていないことに住民が「気づいている」点を忘れずに評価しよう！
- ☐ 信頼できるご近所がいるかどうか、だれの言葉なら響きやすいか、地道な調査と関わりが必要。一足飛びには難しいので、丁寧に関わり続けることで、周りから固めていこう。



逆引き事例

特定の事例・事象は想定しません

実践課題・テーマ

- 地域での成功の秘訣、失敗など、いろいろな「地区福祉委員会あるある」。
実践のヒントとしてまとめた。

成功の秘訣・共感あるある

- ☐ 場づくりの設定は大切。参加者が意見を出しやすい雰囲気を意識していると「建設的な意見」も出やすくなる！…かも！
- ☐ 委員会の会長さんの方が先に、市役所の福祉情報を持っていることも。地域で得る情報は「早い」し、「实际的」なものも多い。（でも間違っている情報も時には…ある！）
- ☐ 会長が交代すると組織の雰囲気や動きが大きく変わる。その見極めとアプローチのタイミングがその後の組織や活動を大きく変えるカギとなる！
- ☐ どこの地区にも、一人は会長よりもよく福祉委員会のことを知っている方が存在する。意外とこういう方とも、先にコンタクトをとっておくと、後々話がスムーズに進むことが多くなるかも！？

ちょっと失敗・困ったあるある

- ☐ 議論が白熱しすぎて結論が難しくなると事務局一任になる…。
- ☐ 福祉委員会は『社協の傘下』というイメージで説明に困ることがある。
- ☐ あまり固い説明だと、関心を持ってもらいにくい、逆に砕けすぎると慣れあいの関係になり距離感が難しい。
- ☐ 世代によって『福祉』の価値観が違い、やりがいと感じてもらうのが難しい。
- ☐ 地域内の『ご意見番』の存在が出過ぎると、周りの委員さんが意見しにくい雰囲気になってしまう。
- ☐ 「地区福祉委員会」といいながら、頑張っているのは会長と役員さんだけ…！
いつかの時点で「委員会、協議会の意味」を再確認する作業が必要と思ひ悶々とする職員。



“失敗、困ったあるある” は成功への近道！！

3 ユニークな小地域実践の紹介 ～社協ワーカーの視点から～

社協ワーカー向けの“実践に生きる報告書”を作成するため、以下の5つの類型をベースに、参加メンバーから自薦・他薦のあった地区福祉委員会を中心に抽出して、ヒアリングを実施。可能な限り事務局と研究会参加メンバーと一緒に訪問した。

なお、以下の類型については、ひとつの特徴を見る目安としながら、具体的に該当地域が抱える課題をキーワードに掲げ、地区福祉委員会の歴史や歩み、この間の活動や組織のあり方の変化、社協ワーカーの関わりや、そのプロセスなどについてまとめている。

《今回設定した地域類型》

- ◆第1分類 集合住宅が多い地域
マンション、公営住宅等、集合住宅が比較的多い住宅地を想定
- ◆第2分類 高齢化が進行している地域
市町村内あるいは府内での比較で、比較的高齢化率が高い地域を想定
- ◆第3分類 農山村地域
人口が比較的に少なく、山間部等の旧村中心の農村エリアを想定
- ◆第4分類 住宅街で若い人口が増加している地域
新興住宅地の再開発、大型マンションの建て替えなど、比較的若い世代（子どもも含む）の転入が多い住宅地エリアを想定
- ◆第5分類 新旧混合の平均的な住宅地を中心とした地域
借家や持家、商業地や住宅街など平均的に混在した、大阪市郊外の住宅地を想定

(I) 第1分類：集合住宅が多い地域から

キーワード 集合住宅／組織の立ち上げ支援／活動メニュー、回数が多い

地域（校区）の概況

結成	平成21年度
校区人口	約900人
世帯数	約530世帯
高齢者人口（高齢化率）	40%（うち120人がひとり暮らし高齢者）
構成団体	－
専門部会	－
活動拠点	集会所・にここ福祉相談所
その他の特徴	外国人世帯（比較的若い世代）が多いがほとんど交流はない。
見守り対象者数	114人
福祉委員数	20人（男性6人／女性14人）
その他	棟ごとの手挙げによって福祉委員を選出

地域特性

府営住宅内には高齢者が多く、独居の方も多い。地域内に買い物等のための社会資源が少ないことから、買い物支援ニーズ・移動支援ニーズが増加してきている。

さらに、小地域ネットワーク会議を近隣の3地区福祉委員会合同開催することにより、地区のエリアを越えた助け合いの意識が根付いてきている。

社会資源

名 称	役 割
●●生協	買い物支援のサポート
子育て支援NPO●●	子育てサロンの開催
●●地区福祉委員会（近隣）	小地域ネットワーク会議での連携
△△地区福祉委員会（近隣）	小地域ネットワーク会議での連携
■■地区福祉委員会（近隣）	男性の料理グループによる弁当販売
☆☆地域包括支援センター	小地域ネットワーク会議や福祉学習会での連携

（備考）

活動概要

活 動 名	開催頻度	開催場所
見守り・声かけ	月1回	府営住宅内（棟ごと）
ふれあい喫茶	月1回	集会所
いきいきサロン	年4回	集会所
独居高齢者の食事会	月1回	にここ福祉相談所

ヨガ教室	月1回（1月はお休み）	集会所
フラダンス	月1回	集会所
ディスコン	月1回（1月はお休み）	集会所
フリーマーケット	年1回	中庭
福祉学習	年10回	集会所
子育て広場	試行的に2回実施	集会所
にこにこ福祉相談所	月～金	にこにこ福祉相談所
三役会議	月1回	委員長宅
小地域ネットワーク会議	月1回	にこにこ福祉相談所

（主な活動の特徴）

見 守 り

見守り・声かけ時の配慮などについては全体で共有しながら、1ヶ月に1回を基本として、棟ごとのやり方（回数）で実施。

- *年1回、小地域ネットワーク会議に参加をしている専門職と同行し、安心チェック訪問を実施。声かけしている方の状況を専門職と一緒にまわることで、より詳しく知る状況をつくっている。
- *見守りを通じて、安心感を生んだり、交流のきっかけになったり、ちょっとしたお手伝いや買い物をお願いできたりと、ひとり暮らしの高齢者からは安心して暮らせるようになったと、徐々に住民の間に浸透してきている。

イベント

ヨガやフラダンス等の各種行事や福祉学習には、平均して15名～20名の参加がある。

今年度から開始した独居高齢者のための食事会をはじめ、ほとんどの行事は近隣地域からも参加可能としている。近隣住民との交流をねらいとして始まったフリーマーケットも今年で5回目を迎え、福祉委員同士の交流を深める貴重な機会となっている。さらに、子育て支援団体や生協と協力して、子育て広場も開催。近隣住民や団地内の外国人世帯にも声かけをしながら、幅広い参加を促した。

三役会議

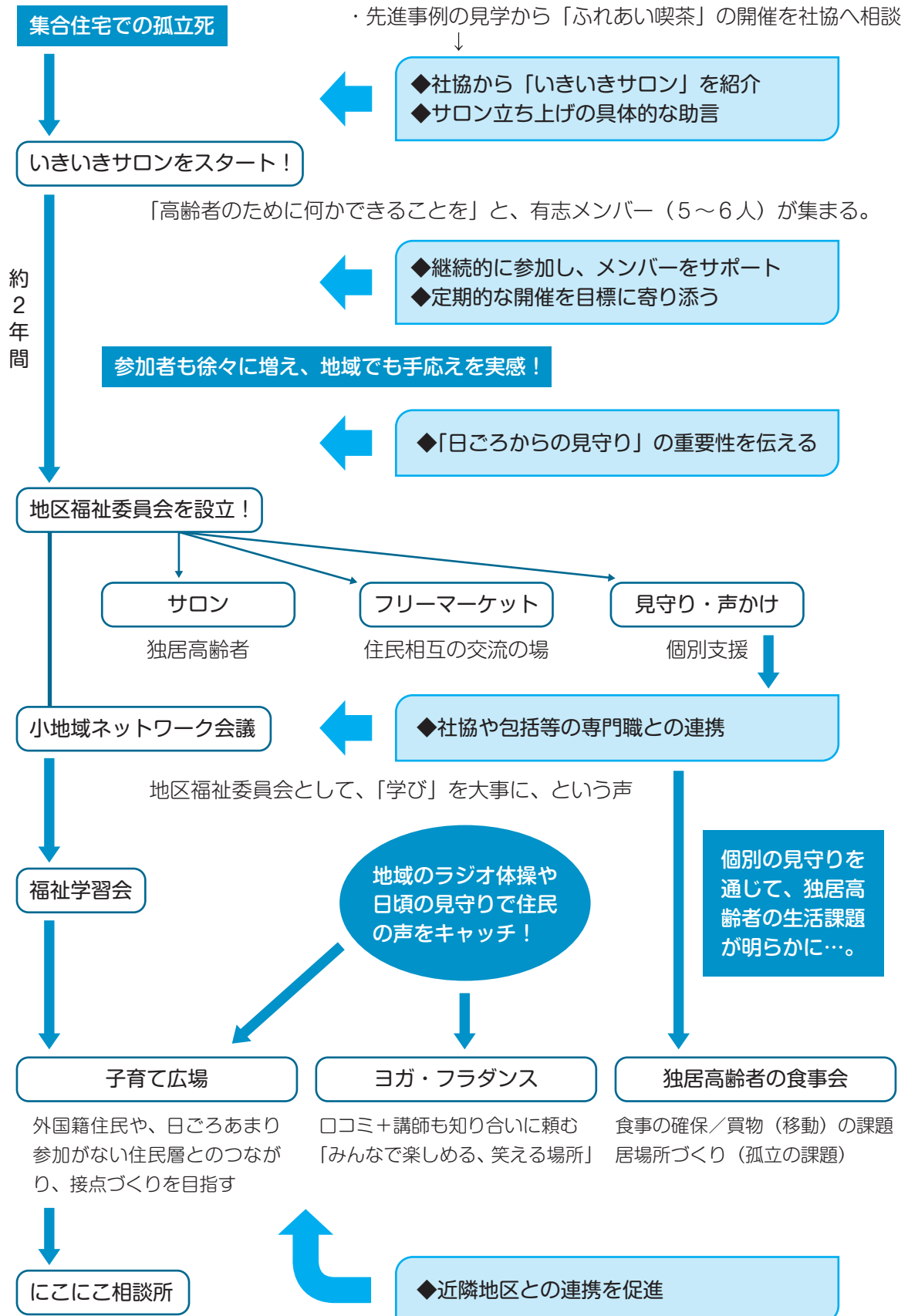
委員長・副委員長などの役員メンバーで月1回、委員長宅に食事会を兼ねて集まっている。役員が仲良くいることが大事。あれやこれやと雑談もしながら、関係を強めている。

小地域ネットワーク会議

小地域ネットワーク会議には、●●住宅地区・○○地区・△△地区の委員長、自治会や民生委員、老人会、社協、施設CSWや包括職員等の専門職等が参加。それぞれからの情報提供、イベント案内、課題提起、福祉学習会の企画などが行われている。専門職が入っていることで見守りのアドバイスや、サービス利用につながるような助言もあり、良好な関係が築けている。



第1分類 A地区 プロセスチャート



* 社協ワーカーの関わりのポイント

チャンスを確実につかむ！

実践辞典①参照

ふれあいリビング（府のモデル）を見学した●●住宅の住民から、ふれあい喫茶をしたいと社協に相談があり、いきいきサロンを勧めたことから関わりが始まった。当初、社協としては●●住宅と接点がなく、『これはチャンス！』と、積極的に通い関係を築いていった。第1回目の開催から活動が軌道に乗るまで、メンバーに寄り添いながら継続的に参加。約2年をかけて定期開催が可能となったところで、次のステップとして見守りの重要性を伝え、地区福祉委員会の立ち上げに至った。

想いにこたえる行動力！

実践辞典③参照

「ちょっとした生活用品などの買い物に困っている住民が増えてきた。今は役員を中心に日ごろの付き合いの中で、自分の買い物時に一緒に買って届けたりしているが、宅配サービスの利用や出張販売会などができないか？」との福祉委員からの相談に、社協ワーカーはすぐ対応。地域の社会資源を確認したり、生協にかけあったり、まだ実現には至っていないが、地域の声に寄り添って、必要な情報の収集や、資源へのつながりを行った。そうした福祉委員の声をしっかり受けとめて、すぐに対応すること、これも信頼関係を築いていく大切なこと。

* 福祉委員の声

活動を広め、続けていくためのコツ

住民の声をしっかりと受け止めること、参加者が笑顔になれること、自分も楽しいと感じられることを大切にしている。活動が途中で駄目だったら辞めたらいい！くらいの想いで、思い立ったらまず何でもやってみる。“無理なくそれぞれができることをやる”意識を委員会として共有することを大事にしている。

にこにこ福祉相談所ができて

実践辞典⑫参照

集まる場所ができたこと、気軽に相談に寄れる場所ができたことをとても心強く感じている。見守りで気になった方など、社協職員の専門職の方を通じてすぐに対応いただける。住民にも見守りやサロン活動を通じて、相談所の存在が浸透し始めており、助けてほしい・手伝ってほしいという声をあげやすくなった。

担い手を確保するために…

実践辞典⑭参照

元気があれば高齢者でも見守りはできるし、むしろ若い人より年が近いので分かり合える部分は大きい。ただ、見守りはするけれど、サロンの手伝いはできないという方も中にはおり、行事ごとの協力者が足りていない現状がある。しかし、社協を通じて、広く市内からボランティアを募ったり、協力員の力を借りたりしながら、なんとかやってきている。

※ボランティアとしての関わりについては参加エリア（地区や地域）を限定していない。

10年後は…

“こんな地域であってほしい”（地区福祉委員会の姿・地域の姿）

10年と言わず、5年後でも担い手はいないかもしれない。それほど高齢化は深刻な問題。

しかし、今実施しているさまざまな行事は、社協と相談しながら、福祉委員以外のお手伝い（ボランティア）を受け入れたり、他地区との交流をうまく取り入れながら続けられている。こうした地域の協力を広く受入れ、近隣の住民との関わりを強めながら、地区福祉委員会としての活動を充実させていきたい。さらに、ひとりの住民としては、いくつになっても今のような交流できる場があってほしいし、毎日みんなが集まれるような喫茶やいろんな楽しい行事が増えれば嬉しい。福祉委員としてはできるところまで続けたい。やっぱり**福祉委員会の活動は楽しい！**だから続けられる！！

社協ワーカーの想い

実践辞典⑩参照

●●住宅地区福祉委員会は、近隣地区との交流やボランティアの協力、その他エリアを超えた関係団体との連携に比較的抵抗がなく、『**外からの力を受ける力**』が高い。これからの地区にはこの意識が大事であると思うし、それができている●●住宅地区だからこそ、担い手問題に悲観になる必要はない、むしろ可能性があると思っている。また、**相談所や小地域ネットワーク会議を通じた専門職との顔合わせ・連携の場がある**ことも大きい。

社協や包括、施設関係者も含め、**専門職等との連携・協働がこれからの鍵**である。

(Ⅱ) 第2分類：高齢化が進行している地域から

キーワード 小地域活動計画／地区井戸端会議／役員体制のリニューアル

地域（校区）の概況

結成	平成10年
校区人口	7,400人
世帯数	3,199世帯
高齢者人口（高齢化率）	32%（うち190人がひとり暮らし高齢者）
町会数	19自治会
構成団体	自治会（15単位）、民生委員児童委員、ボランティア、PTA、老人クラブ、子ども会、人権擁護委員、青少年指導員、少年補導員、青少年健全育成協議会など
専門部会	広報委員会、ネットワーク委員会、シニア部会、支え合い部会
活動拠点	●●●コミュニティセンター（以降、●●●コミセン）
その他の特徴	平成18年度に地区福祉活動計画を策定
見守り対象者数	28人
福祉委員数	39人

地域特性

当時は、昔からこの地域に住む住民と、開拓に伴って移住してきた住民との間に大きな溝があった。現在は、地域内にある4つの地区の活動拠点としてコミュニティセンターが設置されている。高齢化率が高いこと、多岐にわたり地区活動が活発なことが特徴。

社会資源

名 称	役 割
△△小学校	昔あそび、車椅子体験の開催
コミュニティ協議会	夏祭り、わくわく運動会、文化展共催
民児協・老人クラブ	見守り活動の連携
自治会	グループ支援活動のPR、啓発
市（障がい福祉課）	福祉のまちかど案内所との連携
地域包括センター	福祉のまちかど案内所との連携

（備考）

活動概要

活 動 名	開催頻度	開催場所
ふれあい喫茶	週1回	●●●コミセン
子育てサロン	月1回	●●●コミセン

ふれあい会食会	毎月（1月・8月・9月を除く） 第1月曜日	●●●コミセン
ますます元気クラブ	月2回	●●●コミセン
いきいき健康サロン（ヨガ）	月1回	●●●コミセン
障がい児・者の家族交流会	2カ月に1回	●●●コミセン
世代間交流（昔あそび・餅つき・ 車いす体験など）	各年に1回など	△△小学校・■●中学校・ ○○幼稚園など
街角なんでも相談所	毎月第1火曜日	●●●コミセン

（主な活動の特徴）

ふれあい会食会

65歳以上のひとり暮らしの高齢者を対象に●●●コミセンで開催。おいしい食事とともに、落語や大道芸などの出し物もあり、見守りを兼ねた交流の場となっている。

地区福祉活動計画の策定

平成18年に地区福祉委員会役員会および準備会を重ね、地区福祉委員会の役員や各部会長、住民組織代表としてコミュニティ協議会、自治会、民生委員・児童委員、老人クラブ、PTA・子ども会、NPOや福祉施設、小学校等からの参画により策定委員会を開催。市の地域福祉計画や地区井戸端会議（ワークショップ）における課題をふまえ、5か年の地区福祉活動計画を策定した。

※地区井戸端会議の開催

策定委員会が参加団体に呼びかけを行い、KJ法を使いながら『地域の良いところ、困ったところ』をテーマに井戸端会議を開催した。

ふれあい喫茶事業

週に1回、閉じこもり防止等を目的に開催。居場所づくりや介護予防にも貢献している。
男性の参加者が多いのが特徴。

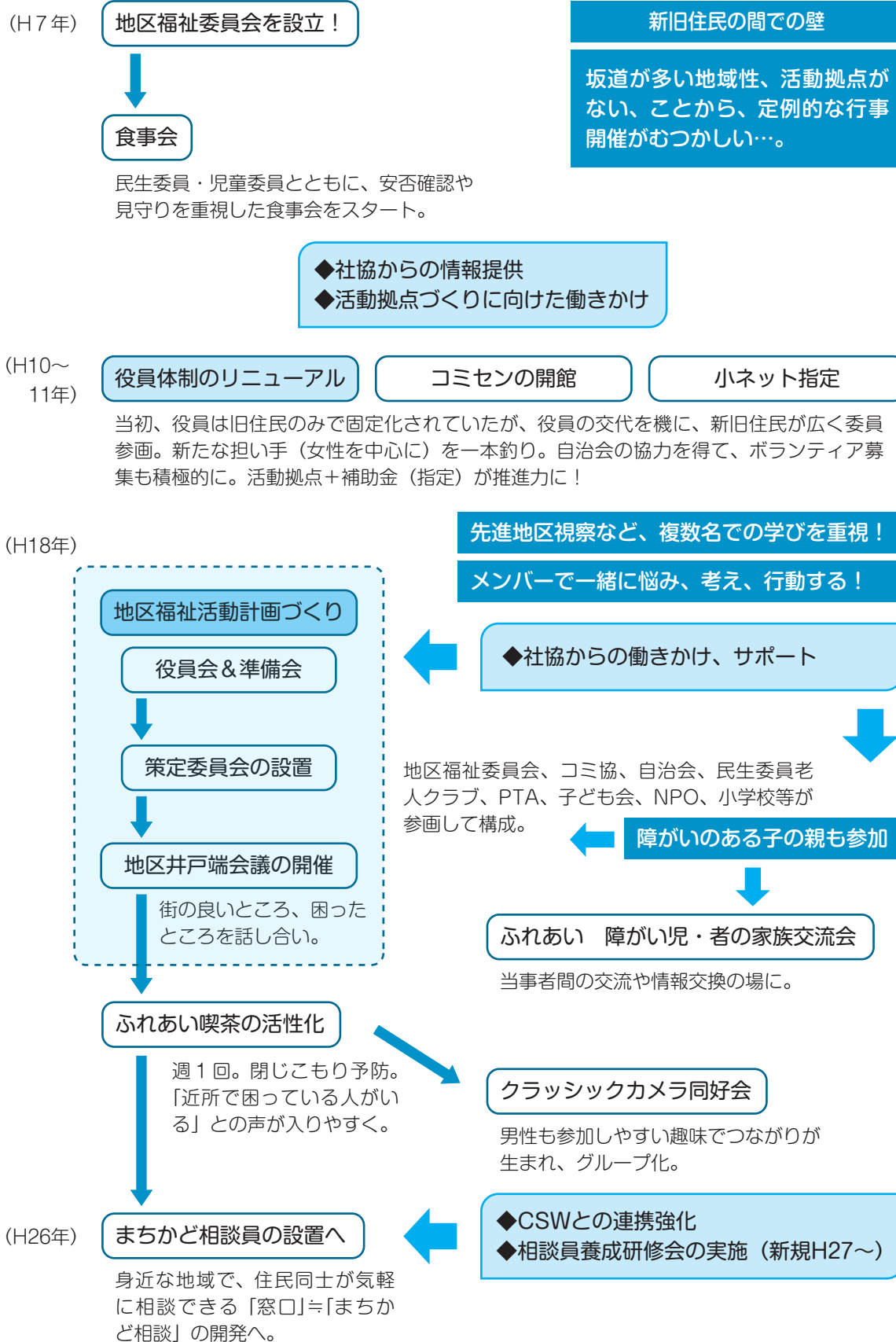
障がい児・者の家族交流会

2ヶ月に1回、定例的に開催。計画策定委員に参画した、障がいのある子どもを持ったお母さんを通じて、当事者間の交流や情報交換の場として実現した。

街角なんでも相談所

社協と地域包括支援センターの協力を得て、ふれあい喫茶の場開設。（H26～）身近な地域で住民同士が気軽に相談できる窓口となっている。

第2分類 B地区 プロセスチャート



*小地域活動計画の基本目標

- ◆より多くの人に地区活動に参加してもらう
- ◆人と人のつながりの輪を広げる
- ◆いざという時たすけあえる、関係づくり、しくみづくり
- ◆安全、安心なまちづくり
- ◆社協（CSW等）との連携強化

*社協ワーカーの関わりのポイント

丁寧に住民の声をキャッチする場の設定

実践辞典④、⑨参照

計画策定に伴って実施した井戸端会議（ワークショップ）では、地区福祉委員に限らず、自治会やコミュニティ協議会、老人クラブや福祉施設などの多様な住民組織や団体が参加できる場とした。この場を通じての困りごとの把握や課題意識の共有は非常に有効であり、その場でつながった策定委員・参画団体を通じて、新たに当事者と家族の交流の場が生まれたり、福祉施設との二次避難所としての受入れの話が進んだり、『こんなことで悩んでいる』『こんなことで困っている人がある』といった住民の声が入ってきやすくなったことも大きな効果であった。

社協のシンクタンク機能の発揮

他地区や他市、他府県における取り組みをしっかりと把握しながら、同じような地域性を持った地区福祉委員会の実践や、同一課題へのアプローチ方法等の情報を提供することも社協の大切な役割。良い取り組みはとことん参考にする！それによって柔軟な発想が生まれ、グッとイメージの具体化につながるかもしれません。

*福祉委員の声

活動拠点の効果と住民の反応

地区に住むいろんな世代、立場の人が安心して気軽に集まれる居場所づくりを目指して始めた喫茶活動。どうしても運営の中心メンバーは固定化されているけれど、協力者も徐々に増え、老後を楽しく過ごす場所として定着してきた。趣味でつながる楽しみがあることから、男性の参加者が多く、例えばクラシックカメラ同好会など、趣味でつながる交流の場が生まれている。

活動を広め、続けていくためのコツ

平成10年頃に新体制となった福祉委員会のメンバーはこれまで福祉に携わる経験0、知識も0という、全てが0からのスタートだったが、他市で先進的な取り組みを行う地区への視察や勉強会の実施など、メンバー全員で行動し・学び・考える機会を意識的に設けた。複数名で動くことで多くの視点で物事を考えることができ、幅広いアイデアも生まれる。また、ともに過ごす時間が多くなればなるほど、個々の想いが共有され、団結力が高まってくる。そうした、常に学び吸収する姿勢と、『誰かが』ではなく、メンバーが『一緒に』悩んで、考えて、行動につなげていくことが大切。そうした意識・時間を新しいメンバーとも共有していく事で、活動と想いのバトンが受け継がれてきている。

担い手を確保するために…

市内に多くある福祉施設との連携強化も一つのポイント。計画づくりを通してできたつながりから、施設との交流行事や災害時を想定した対応の話し合いが進むなど、活動が充実。施設を利用している方やその家族も含め、地区の取り組みを知ってもらうことで、担い手や頼もしい協力者につながる可能性もある。

10年後は…

“こんな地域であってほしい”（地区福祉委員会の姿・地域の姿）

メンバーの高齢化が進み、担い手の課題がある中でも、現在グループ支援活動は非常に活発。その良さを活かし、地域ニーズに沿って、若い世代・多様な主体が関わることでできる機会を増やしていくことを大事にしたい。

また、今後ますます増える高齢者等の支援を必要とする人たちの見守り活動をいかに充実させていくかがポイント。現在の福祉委員だけで全てを担うことは難しく、例えば地域のチカラとして、自治会・コミュニティ協議会との連携を一層強め、より細かく網の目を張り巡らせるような、支えあいのしくみづくりをしていきたい。

社協ワーカーの思い

地区福祉委員会とコミュニティ協議会との連携は一つの課題。『地域への思い』をしっかりと共有しながら、防災や防犯など、連携を図りやすいテーマからでも、少しずつお互いの理解を深め、協力体制を築いていきたい。

(Ⅲ) 第3分類：農山村地域（町村部）から

キーワード 主体性／組織構成／活動の連動性／社会資源とのつなぎ

地域（校区）の概況

結成	昭和62年
校区人口	2,959人
世帯数	1,153世帯
高齢者人口（高齢化率）	32%
町会数	5
構成団体	自治会、民生委員児童委員協議会、議会 他
専門部会	役員会、芋煮実行委員会
活動拠点	各地区集会所
その他の特徴	昔からの旧村地域。 地区福祉委員会・自治会・老人会が一体的に活動している。
見守り対象者数	56人
福祉委員数	114人

地域特性

- 町の中でも、昔からの旧村地域で、集落地と農地からなる田園型の住環境。
交通の利便性が良く、多数の歴史的資源を擁している。

社会資源

名 称	役 割
幼稚園	ふれあい農園／芋煮会
小学校	ふれあい農園／芋煮会
ボランティア	芋煮会等各行事のお手伝い
●●大学	イベントへの協力

(備考)

活動概要

活 動 名	開催頻度	開催場所
ふれあい食事会	年1回	農村環境改善センター
いきいきサロン	年3回（各地区ごと）	各地区集会所
地域リハビリ活動	年1回（各地区ごと）	各地区集会所
世代間交流	年1回	小学校
芋煮会	年1回	小学校
ふれあい農園	4～11月までの年中行事	ふれあい農園

映画会	月1回	集会所
大とんど	年1回	—
友愛訪問	年2回	—

(主な活動の特徴)

とんど

小正月に、正月の松飾り・注連縄（しめなわ）・書き初めなどを家々から持ち寄り、一箇所に積み上げて燃やし、無病息災を願う行事。福祉委員会だけでなく、自治会・老人会も一体になって執り行う。現在は、若い人がなかなか参加しなくなり、行事のやりかたも随分変わってきたが、伝統行事として若い人たちにも繋いでいきたい想いをもっている。

ふれあい農園

10年以上前、地元小学校からの声かけで始まった。農家の人たちの減少と高齢化により、耕作放棄農地が増加してきたこともあり、空き農地を有効活用し、子どもと高齢者が一緒になって作物の植えつけ・収穫を体験する。顔なじみの関係づくりの場になっている。町内すべての幼稚園と地元小学校の子どもたちが参加する貴重な行事。

世代間交流

80歳以上の元気な高齢者25～30名と小学3・4年生が昔遊びの伝承を通じて行う交流行事。地区福祉委員会や自治会の60歳以上のボランティアが送迎を担う。

ブルーガードパトロール

6～7年前、小学校下校時の見守りを目的にスタート。行政に必要性を働きかけ、車両の提供を受けた。現在、60歳～70歳台後半の50人～60人が、地域を良くするためにできることをしたい！と協力してくれている。現在では、町内全域で取り組まれている。

芋煮会

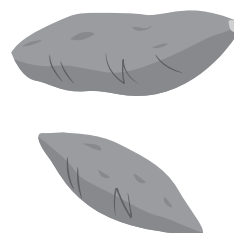
ふれあい農園で作った里芋を使った芋煮会。小学校の全校生徒が参加する。芋づくりをしている間は、地域の人も畑を気にしてくれており、「水がなくなっている」と連絡が入ることも。芋づくりが地域のつながりを生み広げ、さらに芋煮会を通じて地区福祉委員会の結束力が高まっている。

福祉相談会

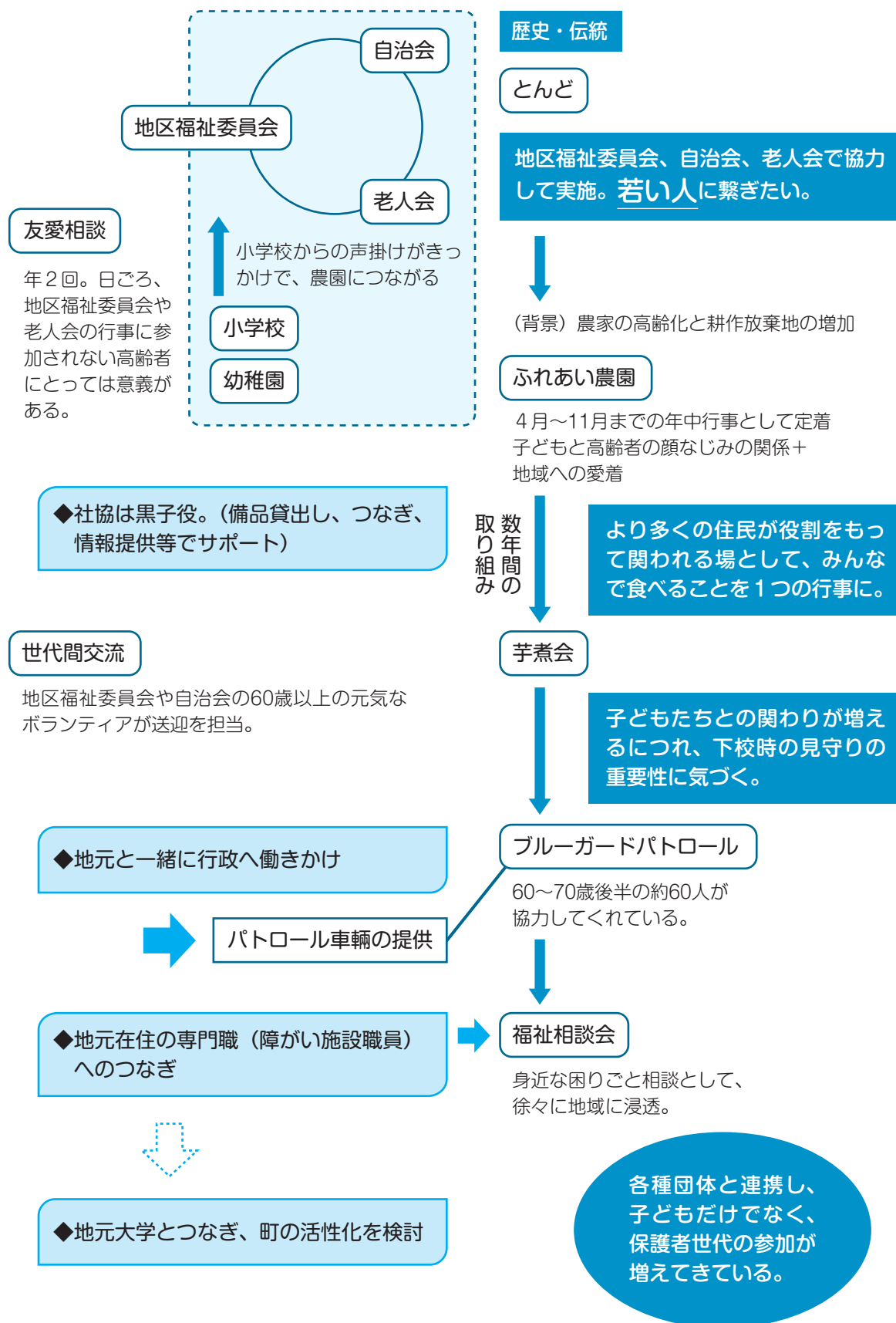
住民から寄せられる困りごとを受け、地区福祉委員会のメンバーがつながる、町内在住の障がい者施設勤務の方に協力を依頼し、定期的な相談会の実施が実現した。身近なところで安心して相談できる場として、徐々に地域に浸透してきている。

友愛訪問

毎年2回、80歳以上の高齢者を対象に心ばかりの手土産をもって、安否確認や見守りを兼ねて近況・健康確認を行う。地区福祉委員会や老人会が主催する行事に全く参加されない高齢者にとって、この活動は非常に意味があり、地区福祉委員会としても大事にしている。



第3分類 C地区 プロセスチャート



* 社協ワーカーの関わりのポイント

やっぱり社協は黒子役！まずは社協がつながる意識を！

実践辞典②、⑦参照

社協の組織構成会員に大学が入ったことから、大学生との協働企画を模索し、『地域が求める多様な世代の参加によるイベントの活性化』と、『学生が求める発表の場』のマッチングが実現した。社協はこうした地域の声をしっかりと受け止めながら、柔軟な発想をもって、地域と地域の社会資源をつなぐ役割を担う必要がある。

やはり地域の主体性を第一に考え、社協は黒子役に徹すること。地区福祉委員会の苦手な部分・弱い部分に社協が寄り添い、多様な団体の強みを活かせる、つなぎ役となることが重要です。

* 福祉委員の声

活動を広め、続けていくためのコツ

実践辞典⑥参照

歴史と伝統を大事にする地域性は一つの特徴。昔から続くお祭りなど、世代を問わず地域のみんが知る一つひとつの行事を大切にしながら、そこに関わる人をどう増やしていくかを常に意識することが大切。また、若い親世代とつながるには、まず子どもとつながることがポイント。地域で子どもを育てることは、将来的に地域の担い手を育てることにもつながる。地域愛を感じながら、みんなが無理なく役割をもって、それぞれができることをカタチにしていきたい。

担い手を確保するために…

実践辞典⑤、⑧参照

昔ながらの伝統行事、お祭り等への参加など、地域を良くしたいという想いを持っている方は多い。この間、地域の特色を活かした行事やそこから見えた課題に対応する取り組みを増やしてきたことで、地域の方々が広く関わるができる機会も増え、福祉委員になっていなくても、行事ごとに手伝ってくれる人が増えてきた。地区福祉委員会への参画にこだわらず、行事ごとの協力者も広く受け入れる。間口を広げ、「できることをできるときに」そんな環境と雰囲気をつくることもポイント。

また、子どもとの交流行事を通じて、保護者世代、学校関係者とのつながりが密になってきたことは、今後の担い手や協力者確保につながる可能性を秘めている。

10年後は…

“こんな地域であってほしい”（地区福祉委員会の姿・地域の姿）

やっぱり自分たちの住むまちをより良く、住みやすくしていくのは、そこに住む自分たちの役割。例えば、ひとり暮らし高齢者のひきこもりの課題には、地域で眠っている空き家を有効活用して、独居高齢者が気軽に集える居場所をつくりたい。

担い手の固定化や高齢化が課題になっているが、この間、地域特性を活かした行事を積み重ねていく中で、学校や保護者等との信頼関係が構築できていることには大きな意味がある。この関係をより太く強いものにしていくためにも、一つひとつの行事に地域 みんなが参加できるよう、丁寧に住民の声を受けとめ、社協と連携しながら新しいアイデアを取り入れていきたい。

この町の伝統と地域性、地域のつながりを活かした、子どもから高齢者まで、みんなが関われる、みんなが役割を感じられる、そんなまちづくりを目指したい。

社協ワーカーの想い

地域に根差した歴史や伝統を大事にする心、自分たちのまちは自分たちで良くしていくんだという想いを大切に、地域の持つチカラ・主体性をより発揮しやすい環境づくりに寄り添っていききたい。

また、24年度の活動計画策定時に地域懇談会を開催したが、こうした場を今後も丁寧に設定しながら、地域の現状と課題を共有し、これからのまちづくりを住民みんなで一体となってイメージできるようなしかけをしていきたい。



(Ⅳ) 第4分類：住宅街で若い人口が増加している地域から

キーワード マンション住民との交流／サロン活動の創出／新しいメンバーの受入れ

地域（校区）の概況

結成	昭和45年頃～
校区人口	17,270人
世帯数	8,488世帯
高齢者人口（高齢化率）	21.5%
町会数	14
構成団体	有料老人ホーム・特別養護老人ホーム・保育園
専門部会	ボランティア部会、広報部会、土曜サロン部会など
活動拠点	コミュニティセンター
その他の特徴	－
見守り対象者数	417人
福祉委員数	104人

地域特性

近年、超大型マンションの建設が続き、若い世帯が急増している地域。校区内の地域によって生活水準も大きく異なっている。また、商店（自営業）、農家、学校、マンションなどがひとつのエリアに混在し、地域としてまとまった取り組みが難しい一面もある。

社会資源

名 称	役 割
コミュニティセンター	住民講座、子育てサロン等
学校	福祉体験学習への支援、福祉まつり等
マンション	地区福祉委員会の広報掲示等
自治会	地区福祉委員会活動への参加、ゆるやかな協力体制
障がい者福祉施設	交流行事

（備考）

活動概要

活 動 名	開催頻度	開催場所
ふれあいサロン	20回／年	公民館
食事会	－	公民館（調理はコミュニティセンター）
子育てサロン	22回／年	コミュニティセンター
配食サービス	月1回	－

一斉見守り声掛け訪問	月1回	—
●●まちかど相談	59回／年間	●●校区地域包括支援センター
あいあいサロン	校区出前サロン	公民館
学習講座（住民講座）	—	コミュニティセンター

（主な活動の特徴）

子育てサロン

大型マンションに住む若い世代も利用。また、対象を校区内に限定していないことから、他の校区からも参加がある。

あいあいサロン ※H23～

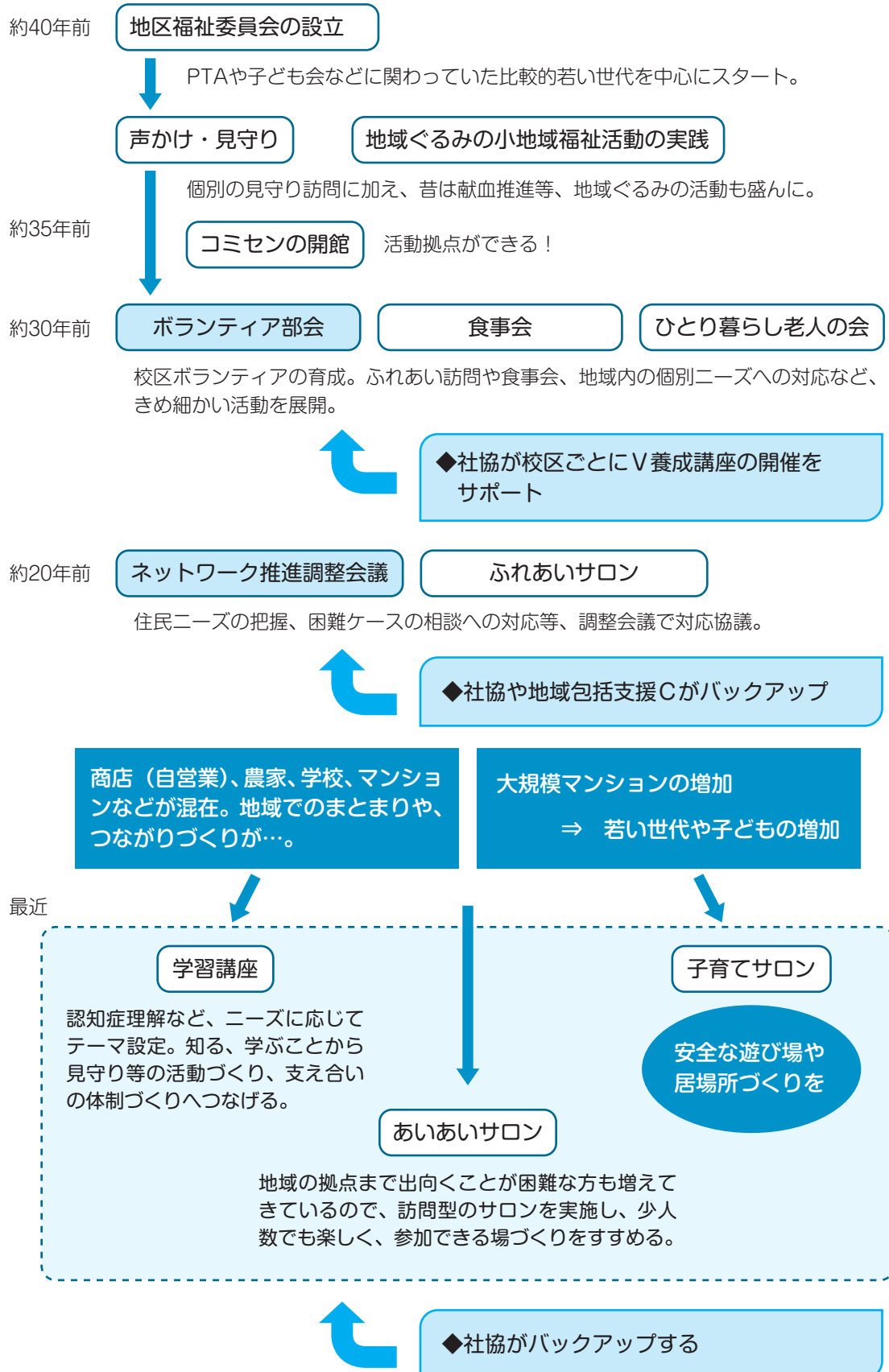
なかなか拠点まで出向くことが困難な人も多い中、そのニーズに応える形で実現した、校区内の全地区を回って実施する訪問型のサロン活動。参加者も年々増加傾向にあり、校区全域での顔の見える関係づくりが広まってきている。

学習講座

認知症理解のための学習講座など、地域ニーズに応じてテーマ設定を行う。知り・学ぶことから、地域での見守り・支えあいの体制づくりにつなげている。



第4分類 D地区 プロセスチャート



大型マンションへのアプローチについて…

実践辞典④、⑯参照

若い世代の人口が増加したこと、新たな層が大型マンションに転入してきたことなどから、支援対象の幅が広がっている。例えば、大型マンションにも多くの高齢者が住んでいるが、地域との関わりは薄い。また日中を一人で過ごす中間独居の高齢者、老老夫婦の方とのつながりや居場所づくり、さらには、若い親世代・子どもたちへの支援を一層充実させていく必要がある。その一つの手段として、子育てサロンの充実やあいあいサロンがスタート。社協ワーカーは、広報や共同募金等を通じて大型マンションの自治会との接点をつくり、福祉委員会とのつながりをサポート。自治会長が福祉委員会に参画したことで、マンション内での行事の掲示などの協力が得られるようになった。少しずつではあるが、参加者が広がっている。

多様なサロン活動を具体化するうえで大事にした視点

実践辞典⑥参照

この地域は、当時から、福祉委員会や民生委員、PTAや子ども会などの地域の関係者による重層的な見守り活動が行われており、住民ニーズの把握と、その声に基づいた活動を創り出すチカラがあった。そのため、困難ケースの相談が地域から入ってくることも多く、社協職員・専門職が一つ一つのケースに丁寧に関わることを意識し、必要な支援へのつながりとともに、新たな活動を実現するための後方支援を行ってきた。

また、多様なサロン活動の具体化にあたっては、地区福祉委員会が主体的に、地域ニーズに応じた柔軟な実施方法・実施形態を工夫してきた。例えば、子育てサロンに関して言えば、乳幼児／就学前の児童と年齢別に実施している。どうしても日々の関わりが希薄になってしまいがちな住民層へも、参加者の居住地域を限定せず、オープンな体制をとるなど参加しやすい環境を整えたことで、地区や市域を越えて友人と参加する人が増えるなど、効果があらわれてきている。



活動を広め、続けていくためのコツ

地域の声をしっかりと受け止めること。やはり、住民の身近な存在として、様々な困りごとが地区福祉委員のもとに入ってくるし、そんな声を社協や包括などの専門職につないでいく役割も担っている。社協等との連携は、地域に寄り添った活動をしていくうえでも重要なポイント。そうした連携によって、本当に地域に必要な取り組みを具体化していくことができる。

そして、続けていくための秘訣は、活動の中に喜びを見出すこと。人と巡り合うこと、つながることから生まれる取り組みがあり、そこに多くの人が集う。これがまちづくりに関わることの実感でもある。活動の楽しさに加えて達成感がある。

活動拠点ができて…

実践辞典⑫参照

コミュニティセンターができて34年。その間に、様々な行事が増え、多くの人が集まるようになって、活動の幅が広がってきた。住民一人ひとりの意識としても、交流の場、情報交換できる場として浸透してきている。ただ、今はあくまで行事開催時の使用に限られているため、地域の中に、いつでもだれでも自由に集まれるような拠点が欲しい…。

担い手を確保するために…

実践辞典⑤参照

現地区担当者が20年前に担当していた当時のメンバーが、今もなお、委員長や役員として福祉委員会の中心を担っており、現在のメンバーだけでの活動にはいずれ限界がやってくると感じている。

そのためにも、引き続きマンション単位に構成される自治会等を通じて、地区の活動や行事等の周知を行い、焦らず時間をかけてでも、丁寧に住民全体の理解を促し、新たな住民層の参加につなげていきたい。今、改めて自治会や地域協議会と福祉委員会がお互いに手をつないで、もっと地域の多様な主体を巻き込んでいけるように、横のつながりを広げていくことが大切だと感じている。

10年後は…

“こんな地域であってほしい”（地区福祉委員会の姿・地域の姿）

いつでも気軽に地域の人が立ち寄れる喫茶をつくりたい。その喫茶（居場所）で、相談ごとや困りごとを広く受け止めて、社協や地域包括支援センターとともに、自分たちでも必要な支援先へつないでいきたい。また、例えば、まちかど相談所と子どもの遊び場を併設するなどして、子どもと高齢者が自然と一緒に過ごすことができる環境をつくり出し、世代を超えてつながる場、憩いの場を増やしていきたいと思っている。

こうした夢や想いを地区福祉委員会や地域の人々で語り合いながら、語り合いを続けながら、ただの夢ではなく、実現につなげていきたい。

社協ワーカーの想い

市内の各地区福祉委員会では、毎年度、活動の成果と次年度に向けた課題整理を行い、社協が活動概況一覧を作成して全地区で共有している。こうして市内全域の取り組み状況や課題をみんなで共有しながら、必要なエッセンスを取り込み、新たな活動の創出や共通する課題へのアプローチのしかたを学ぶなど、それぞれの活動の活性化につなげている。市内他地域の活動を知る機会をつくること、自分たちの取り組みを振り返る機会をつくることで、地域住民1人ひとりの主体性が育まれ、助け上手・助けられ上手の関係性が築かれていくように思う。そんな、ちょっとしたきっかけづくりを社協職員として大事にしていきたいですね。



(V) 第5分類：新旧混合の平均的な住宅地を中心とした地域から

キーワード 男のサロン、サロン運営の見直し、地区の主体性

地域（校区）の概況

結成	平成9年
校区人口	6,993人
世帯数	2,737世帯
高齢者人口（高齢化率）	1,823人（高齢化率26%）
町会数・自治会数	21
構成団体	・K地区…区、財産区、消防分団、神社氏子総代会、文化財保護推進委員、共同墓地推進委員、障がい者の会、青少年指導員、老人会、婦人会、子ども会、小中学校PTA、ゴミ減量化・リサイクル市民会議 ・Y地区…区協議会、自主防災会、まちづくり委員会、青少年対策協議会、子ども会、小中学校PTA、Y自治会、A自治会、Y老人クラブ、A老人クラブ、明るい選挙推進協議会
専門部会	—
活動拠点	K会館、Y自治会館、I会館、Kふれあい館、YA集会所、KA自治会館
その他の特徴	—
見守り対象者数	—
福祉委員数	56人

地域特性

- ・古い伝統と農業中心の集落に新興住宅が混在し、伝統を守りながら新しい集落を形成。
- ・生活必需品の買物は徒歩で20～30分要する。近隣にはスーパー2店、酒店1店、コンビニ1店のみ。公共交通機関としてJRや私鉄の最寄り駅より徒歩約20分かかる。また、高齢化率の高いY地区では急坂があり、高齢者にとって行き来も辛い現状がある。
- ・神社・寺院、文化財等が多くあり、財産区にも指定される歴史ある地域。
- ・財産区K区が旧地域、Y区が新興住宅がある地域であり、住民層が異なる。
- ・1年前から自治会主体によるカフェなども開催。

社会資源

名 称	役 割
A医院／Nクリニック	医療機関
Kデイサービス／Hデイサービス	（高齢）社会福祉施設
Kケアプランセンター	居宅介護支援事業所
I事業所	（障がい）社会福祉施設
K小学校	教育
A幼稚園・保育所	教育・保育
警察署（派出所）、郵便局	—

寺院、神社 9 カ所	—	
I 広場、T 広場、A 公園	—	
(備考)		
活動概要		
活 動 名	開催頻度	開催場所
子育てサロン	毎月第 1 金曜日	I 会館
男のサロン	毎月第 2 金曜日	I 会館
いきいきサロン	毎月第 3 金曜日	K 会館
共生型サロン	毎月第 4 火曜日	Y 自治会館
あいさつ・声かけ運動	年 2 回	駅前、通学路
世代間交流（昔あそび）	年 1 回	—
広報発行	年 2 回	—
福祉のなんでも相談会	年 3 回	Y 自治会館
(主な活動の特徴)		
男のサロン		
・ 参加費等は原則無料で都合のいい時間帯で自由に参加できる。		
・ カラオケ、囲碁、将棋、麻雀を用意しており、「自由に遊んでください」と案内している。		
共生型サロン		
・ 住民の主体性が発揮されて立ち上がったサロン。「いろんな形があってもいい」という思いが 5 年間続き、自然な形で交流が図られている居場所。		



第5分類 E地区 プロセスチャート

H9～

校区福祉委員会設立

第1段階
校区・サロン立ち上げ

いきいきサロン

出前による歌体操が中心

小学校で昔あそび

世代間交流活動

子育てサロン

民生委員が父子家庭への支援をしていたことから、課題解決につながる取り組みとして具体化。

H14～

小地域ネットワーク活動開始

共生型サロン

いろんな形があってもいい！
世代や性別を問わない自然な交流

男のサロン

男性同士の交流を図ろう！
他校区の取り組みを参考に開設

H18～

第2段階
男のサロン転換

H25.3

役員会

H26.6

男の喫茶 見学交流会

*新体制に

H26.8

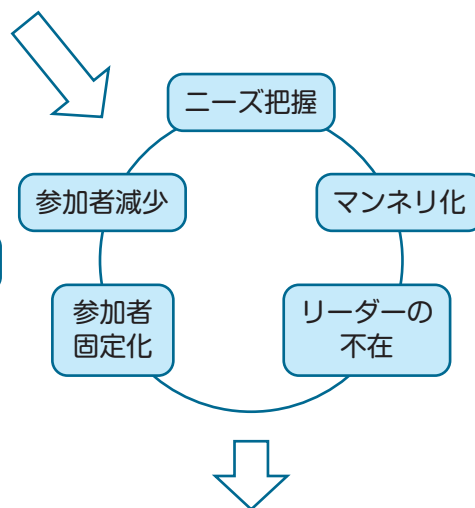
役員会

H26.10

男のサロンで話し合い

H26.12

参加希望者から問合せ



具体案

- ①ニーズ把握 : 最近の60代の興味関心はなんだろう？
- ②プログラムの充実 : 参加者の特技を発揮、気軽に楽しめる場づくり
- ③啓発活動 : 老人会から協力を得る、チラシやポスター
- ④イベントの開催 : 老若男女が参加できるイベントの開催
- ⑤サロンでの防災マップ作り

* 社協ワーカーの関わりのポイント

活動メニューの具体化に寄り添う

平成9年頃に地区福祉委員会が立ち上がった。当時は歌体操など出前サロン型の活動が中心。活動の展開にあたっては、何度も社協に相談があり、社協としての意向や方向性も伝えながら、例えば、父子家庭への支援の延長で子育てサロンを立ち上げたり、男性の居場所を求める声があれば、他地区における男のサロンの視察を提案したりと、地域の課題解決を意識した取り組みの具体化に結びつくように、寄り添いながらのサポートを心掛けた。

場面の展開を見極める力

実践辞典⑦参照

平成18年に立ち上がった男のサロン。自由参加、参加費等無料を基本スタンスに設立当初は5人～10人程の参加があった。参加メンバーは民生委員が中心で、政治・経済・環境・歴史等をテーマに毎回、参加者がフリーに話すような内容であった。しかし、時間の経過とともに活動はマンネリ化し、参加者も固定化。さらには自身が高齢化で動けなくなったり、亡くなったり、家族の介護で参加困難となるなど参加者が徐々に減少。こうした現状に思い悩み、今後の運営について、地区福祉委員会から社協へ相談が入った。

社協としては、福祉委員会の主体的な取り組みを見守ることも大事にしながら、変化のタイミングにしっかりと寄り添うことを意識。

今後の活動の方針を話しあう場にも参加し、実習生受け入れの依頼等を通じて、新たな視点や発想を側面的に提案するというのも、身近な存在である社協だからこそできる関わりだと思う。

* 福祉委員の声

活動を広め、続けていくためのコツ

各委員が、それぞれの地域で複数担っている役職や活動を通して、そのつながりから行事への参加を募り・増やし、サロン活動等を継続・発展させてきた。これからの課題でもあるが、まず福祉委員会の存在や役割、機能を周知することが大事。そのうえで、プログラムや開催場所、周知方法等を工夫していく必要がある。チラシや広報物による周知活動も効果的であるが、やはり口コミによる効果は大きい。いかにして活動の魅力を伝えるかは、ヒトとヒトとのつながりを大切にすることからはじまるように思う。

隠れたニーズを把握するために…

特に男性は退職してから横のつながりが少なく、新たにつながることに苦手意識があるように感じる。体力的な問題や、そうしたつながりの希薄化による気持ちの弱りなどから自宅へひきこもっている男性が、潜在的に抱えるニーズがあるのではないかと考えている。団塊の世代が何を求めているのか分からないという課題もあるが、こうした層が参加しやすいように、季節性のある内容や、多くの人が特技を活かしたり、役割をもって関わられるような行事を企画し、実現してきている。こうした参加をひとつのきっかけに、福祉委員のメンバーが積極的に関係を築き、本当に必要としている声を受けとめている。

10年後は…

10年後のイメージ… “こんな地域であってほしい”（地区福祉委員会の姿・地域の姿）

現状、地域からは様々な困りごとの声が聞こえてきている。例えば、サロンに行く為のアクセスの方法がない。坂が多く移動手段がない、など。担い手の問題にしても、若年高齢者の参加をいかに促すか、地域内で同様の活動を展開する老人クラブ等の活動と地区が行うサロン活動をどう差別化していくか？社会とのかかわりを持っていない層に、どうアプローチしていくかなど、課題が山積しているが、まずは新たにスタートした「男のサロン」をいかに充実させていくか。

ポスターの作成、自治会の回覧、広報の全戸配布などの広報強化はもちろんのこと、男性がいきいきと活躍できる場（サロン、買い物支援など）を増やしたり、参加しやすさを意識したプログラム（例えば、まずはカラオケ大会！）を充実させながら、参加者を増やし、地域に活動を浸透させ、誰もが気軽に集まりやすい環境を整えていきたい。

社協ワーカーの想い

実践辞典⑦参照

地域の現状を見渡す中で、男のサロン（男性の居場所）の必要性を感じ、効果的かつ魅力的な運営のあり方について話し合いを重ねている福祉委員の方々の想いを大事にしたい。例えば校区と協働したニーズ把握を実施したり、男性の担い手確保に向けて、責任感や得意分野をくすぐるプログラムの開発や周知の方法を一緒に考えたり、多様な主体との協働を模索するなど、社協としては、こうしたキーパーソンとなる方々の主体性を尊重し、とことん黒子役としてサポートしていくことが重要。

4 まとめ これからの小地域福祉活動実践のために

大阪府立大学 小野達也

1. 小地域福祉活動への期待

小地域福祉活動への期待が高まっている。2000年代を武川正吾は「地域福祉の主流化」と称したが、それに合わせるように小地域福祉活動への期待も大きくなっている。

少子高齢化や格差の進行に伴って、さまざまな生活問題が地域で発現している。これまでであれば、家族や社会で対応されてきたことが、つながりの弱体化により対応が難しくなっている。また、そこで機能すべき行政や専門職も有効な対処ができずに、制度の狭間の問題が生じていることが指摘されてきた。こうした問題に対して、地域での解決が期待されている。

大阪府下の社会福祉協議会は、地域の組織化にいち早く取り組んできた。今や、ほぼ全域に地区福祉委員会（地区社会福祉協議会）等が作られている。こうした地域福祉の社会資源が有効に機能することによって、コミュニティソーシャルワークも実態的な活動となっている。その意味では小地域福祉活動は地域福祉の基盤であり、これがあるからこそ地域福祉を組み立てることができるといっても過言ではない。

しかし現在、状況は変化してきている。小地域福祉活動の担い手は高齢化し、世代交代が求められている地域も少なくない。また、地域組織も弱体化してきている。2025年問題等を考えれば、地域への期待はより大きくなるが、肝心の小地域福祉活動自体を見直す時期に来ている。

本研究会は、その課題に取り組み、方向性を模索している。もちろんこれは簡単に結論が出るようなものでもない。だが、取り組み続けられない限り新たなものは生まれてこない。研究会ではワーカーの問題意識や経験を共有し、検討し、深化させ、それが見える化するというところを行った。ただし、ここでの見える化は成果の見える化、という狭い意味のものではない。確かに近年、財源問題などを背景に地域福祉の成果が見えるようにすることが求められている。これは、確かに重要なことであり、それに対する方法も立てる必要がある。しかし、ここで目指したいのはもう少し広い視野に立って、よりよい地域福祉を生み出すための小地域福祉活動の見える化である。転換期の現在、これからどのような方向を目指せばよいのかということに関する見える化（あるいはその方向性の確認）である。それもワーカー（主に社会福祉協議会の職員を想定するが、より広くは地域での支援に関わるワーカーを含む）に向けた研究をするということが今回の特徴である。

2. 小地域福祉活動をめぐる動向

(1) 2つの条件

小地域福祉活動のあり方を検討するうえでの2つの条件がある。一つはワーカー自身の経験（知）に関わることであり、もう一つがより広く社会的な状況の変化である。

①ワーカーの経験知（値）

前述のように、大阪では地域の組織化をはじめさまざまな活動や実践が積み重ねられてきた。ワーカーからすれば、地域に出た場合に地域の組織はすでに存在している場合がほとんどであり、組織化活動を自ら経験する機会は少ない。ワーカーはすでにある組織の活動を支援していくことを期待される。地

域での信頼を得て、住民とともに（住民主体で）地域活動を進めようと思えば、それまでの歴史や知識を知り、援助技術を継承することが必要となる。歴史、知識、技術を受け継ぎつつ、日々目の前に現れる問題に対応することが求められる。地域援助技術では、社会資源を新たに創り出していくことが強調されるが、大阪のように一定の蓄積がある場合には、継承し、発展させていくことがより重みを持つことを意識しなければならない。

②小地域福祉活動を取り巻く状況の大きな変化

その一方で、現在生じている社会事象は、これまでのものと性格が大きく異なっている。小地域福祉活動に関係することとして、担い手の変化、地域組織の変化、制度の変化をあげることができる。担い手の変化は、担い手の高齢化に伴い、次の担い手をどのように生み出すかという課題である。担い手の代替わりは多くの地域で直面している問題である。その際に住民主体という原則（理念）をどのように継承できるのであろうか。そして新たな担い手を考える場合に、これまでと同様の組織化論でよいのかが検討されなければならない。

地域組織に関しては、既存の地域組織の弱体化がある。典型的には自治会（町内会）であり、その参加率の低下や活動の低調化である。また、婦人会（女性会）、子ども会、老人会（さらには青年団！）といった既存組織も活動が低調となったり、解散に追い込まれたりしている。ただし、地域組織の変化に関してはもう一方に、分権化の動向の影響がある、市町村という基礎自治体よりもさらに生活に身近な場への地域内分権化が進行している。まちづくり（コミュニティ）協議会等の創設・始動である。これは地域の再活性化を目指すものであり、既存組織のあり方に影響を与える。この新たな組織は特定の課題ではなく、まちの多様な課題に対応する総合的な性格を持つ。これにより、福祉のまちづくり組織である地区（校区）福祉委員会の存在意義が改めて問われる。小地域福祉活動の性格を検討する必要がある。＊この点をさらに考えるのなら、少子高齢社会、地方消滅とまで言われる中で、人が住める、住み続けられる地域をいかにつくるかという課題をも意識する必要がある。狭い福祉でなく広い福祉への転換が求められる。

社会制度に関しては、社会制度と地域との連動、あるいは脱制度化による諸課題・諸活動の地域への再埋め戻しといえる状況がある。元来社会制度はそれぞれの目的を達成するための機能的なシステムであり、社会制度と地域とは編成原理が異なっている。しかし、近年は社会制度の不十分な部分を地域社会が補うという実態が生まれている。さらには介護保険の改正に見られるように、一度社会制度として組み込まれていたプログラムが、脱制度化し自治体レベル（さらには地域へ）にその取り組みが戻されるということが生じている。これを、地域でどのように対応するかという技術レベルの問題として考えるか、社会資源の分配としてどうあるべきかということまで視野に入れて考えるかで、捉え方が大きく異なる。これは実践の内容にも影響することになる。

(2) 基本的な方向性

ワーカーはこのような2つの条件を引き受けていくことが求められている。これまでの援助技術の流れを受け継ぎつつ、大きく変化している状況により根本的に向き合うことが求められている。そのためには、次の2つの姿勢が必要となる。

- A. 眼前の状況に対応すること
- B. より根源的に問題にアプローチできること

これは、安直な例えになってしまうが、目の前に倒れている人をどうすればよいのか（Aに関する

問い)ということと、人が倒れるような状況を作らないためにはどうすればよいのか(Bに関する問い)、ということである。後者は政策的なアプローチであり、前者は現場での実践的なアプローチである。ワーカーの立場としては、目の前に倒れている人を放っておくことはできない。つまりAの前の問題に対応することは必要条件である。しかし、今の時代はBの志向を併せ持ってその問題に対してより根源的に考えてアプローチしていかないと、事後対応に終始してしまう。

これは組織論で言われた、シングルループ学習とダブルループ学習に対比させて考えておくことができる。シングルループ学習では、既存の行動や考え方によって問題を解決していく。これに対して、ダブルループ学習では、既存のものではなく考え方や行動の枠組みを検討し直していくことである。現在の状況への対応は、この両者の連動をいかに生み出していくかということである。この両方の学習を使い分けながら、現在の課題に向き合っていくことになる。

3. 今回の研究会の性格

今回の研究会は、ワーカーの体験や実践知を持ち寄り、収集し、提示する（見せる化）というものである。先ほどの眼前への対応にせよ、より根源的なアプローチにせよ、それはワーカーの実践として現れる。今、何が生じているかを考えるには、今、何をしているかというワーカーの実践を集めることから始めなければならない。

その際に、あらかじめ枠組みを整理・分類できれば、それに従った収集ができる。しかし、現在は新たな実践を考える段階であり、厳密な枠組みを設定してしまうと、かえって重要な内容を見逃してしまう懸念がある。そのために今回はごくゆるい枠組みを作ったうえで、さまざまな取り組みや考え方を集めていくという手法をとった。

つまり今回の研究会は、小地域福祉活動の整理・体系化のための要素の本源的蓄積という段階である。見える化とは、そうした意味での現在の取り組みの見える化である。この内容自体については、本報告を見ていただきたい。以下では、さらに今後の整理や根源的なアプローチにつなぐための小地域福祉活動に関わる参照点を示す。

4. 今後の小地域福祉活動を検討するための参照点

少子高齢化や格差社会という状況は、世界最先端の課題である。これに取り組む地域福祉、小地域福祉活動はそれ自体たいへん意義のある営為である。それだけの歴史・時代性を持つ小地域福祉活動を考えようとするうえで、次のような点を意識する必要がある。

(1) 住民主体と多様な住民の参加の実現

これは担い手の問題に関わる。これまで地域組織をベースにする傾向があったが、新たな担い手が問題となる中で、多様な住民の参加を得ることが重要となる。そこにはいわゆる「新住民」やテーマ型の問題に関心を持つ住民、そして地域に関心のない住民も含まれる。これまで特に一部の住民に担われていた活動を地域全体の取り組みとし、かつ、そこに住民主体を実現することができるかが問われる。そのためには、地域（あるいはローカリティ）の持っている価値や福祉の意味合いを住民の間で再確認していくことが必要となる。これは地域の時代を生み出していくための基礎的な部分となる。

(2) 総合型のまちづくりとの関係

小地域福祉活動は福祉のまちづくりを志向してきた。しかし、少子高齢化や格差社会、あるいは地

方の消滅という論点の中で、地域に住民が住み続けていけること自体が基本的な課題として浮上してくる。それを考える場合、狭い意味での福祉でなく生活に包括的に関わる広い意味での福祉という方向を意識する必要がある。例えばまちづくり協議会等の動きとのかかわりの中で、福祉の総合化が問われている。

(3) 社会制度との関係

社会制度とのかかわりで小地域福祉活動への期待が高まり、脱制度化への対応も求められている。しかし、小地域福祉活動は単に社会制度を補うものでもなければ、社会制度を基準にしてその存在意義が規定されるものでもない。小地域福祉活動固有の価値を改めて探り、これからの時代に位置づけていく必要がある。これは「手段としての小地域福祉活動から目的としての小地域福祉活動」への転換といえる。そうすることで地域の側から社会制度のありようを構想＝要求するという展望も生まれる。

(4) ポジティブな活動の性格とプログラム

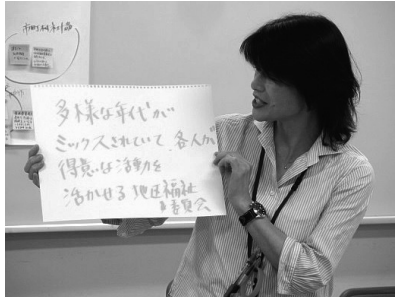
社会的排除や生活困窮問題への対応を考えれば、最低限度の生活保障は重要である。しかし、これからの時代はその地域での生活の質が高いかどうか、人が住み続けていくかどうかにとって欠かすことのできない論点となる。小地域福祉活動も、よりポジティブな性格を持つ必要がある。「ポジティブな小地域福祉活動」、あるいは「増進型の地域福祉活動」と表現することができる。イキイキと生活することのできる地域、そこでの生活に喜びを見出せる地域を作り出す小地域福祉活動、プログラムを構築していくことが重要となる。

(5) すべての世代がイキイキと暮らせて継続する地域へ

地域福祉の条件として、子ども（子育て世代）から高齢者までその地域に住むすべての人のニーズが満たされることがあげられる。しかしそれは、決して今だけのことを意味するのではない。そこに時間軸を加える必要がある。生涯にわたって増進型の地域福祉が可能となること。さらには、次の世代も含めて、継続的に地域が存続していくことが重要となる。これまでのまちづくりでは、ニュータウンや集合団地等に見られるように、世代間の継続が大変難しい。現代は、サステナビリティが鍵概念となっているが、地域福祉はこうした面を積極的に取り入れていくことができる領域である。

大きな歴史的スパンで見れば、グローバルを志向する時代から、ローカルが持つ意義を再評価する時代への転換が始まっている。そこでの生活では家庭と職場の往復だけではなく、そこに地域という要素が再び、新たな意味を持って登場する。生きがいから見ても、仕事や家族、そして個人的な趣味に重きをおくという個人主義化していた状況から、地域という場でさまざまな人との関わり合いの中で生きがいを生み出す時代へととなってくる。少子高齢化とは、大人になるまでの時間が長くなり、仕事を引退してから時間も長くなるということを示している。その主要な場（アリーナ）は地域である。地域の意味の復権、新たな地域社会づくりを意識的に進めていくことこそ、新たな時代の小地域福祉活動である。かつて意識的に地域の組織化をいち早く進めたように、新たな時代を切り開く活動を生み出すことが求められている。

《業務研究会メンバーの想い ～振り返りにかえて～（第2回業務研究会より）》
～私は10年後、●●な「地区福祉委員会」であって欲しい!!～



豊中市社協：畑中 葉子さん
『多様な年代がミックスされていて、各人が得意な活動を活かせる』

茨木市社協：佐藤 遼さん
『あたたか〜い』



箕面市社協：上田 健太さん
『負担にならない』

箕面市社協：山本 祐さん
『生まれてから死ぬまでつながれる』

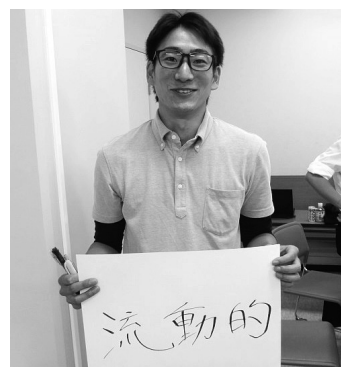


寝屋川市社協：浅尾 和弘さん
『コーディネートするで!』



交野市社協：今井 玲美さん
『無限大!』

富田林市社協：小西 穰さん
『流動的な』



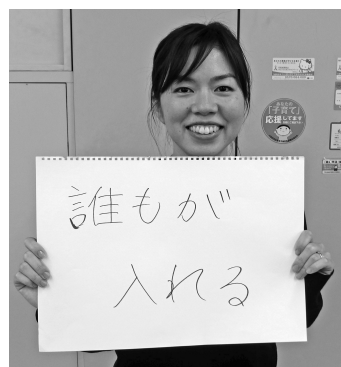
大阪狭山市社協：阪本 裕美子さん
『みんなが頼れる』

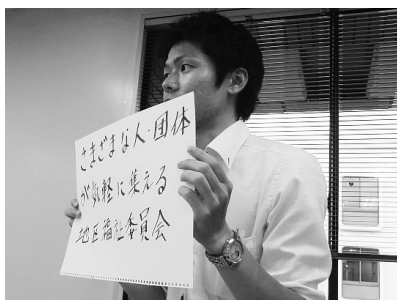
羽曳野市社協：文珠 善之さん
『皆が知っている』



岸和田市社協：高馬 瑤子さん
『誰もが頼れて、誰もが必要とする』

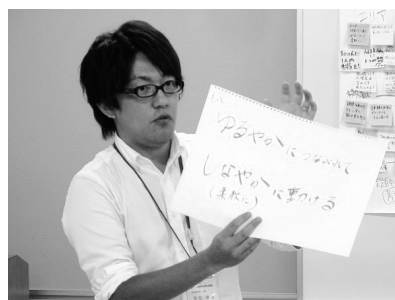
大阪府社協：藤井 美貴さん
『誰もが入れる』





大阪府社協：豆村 祐樹さん
『さまざまな人・団体が気軽に集える』

大阪府社協：多田 健造さん
『ゆるやかにつながれて、
しなやかに（柔軟に）動ける』



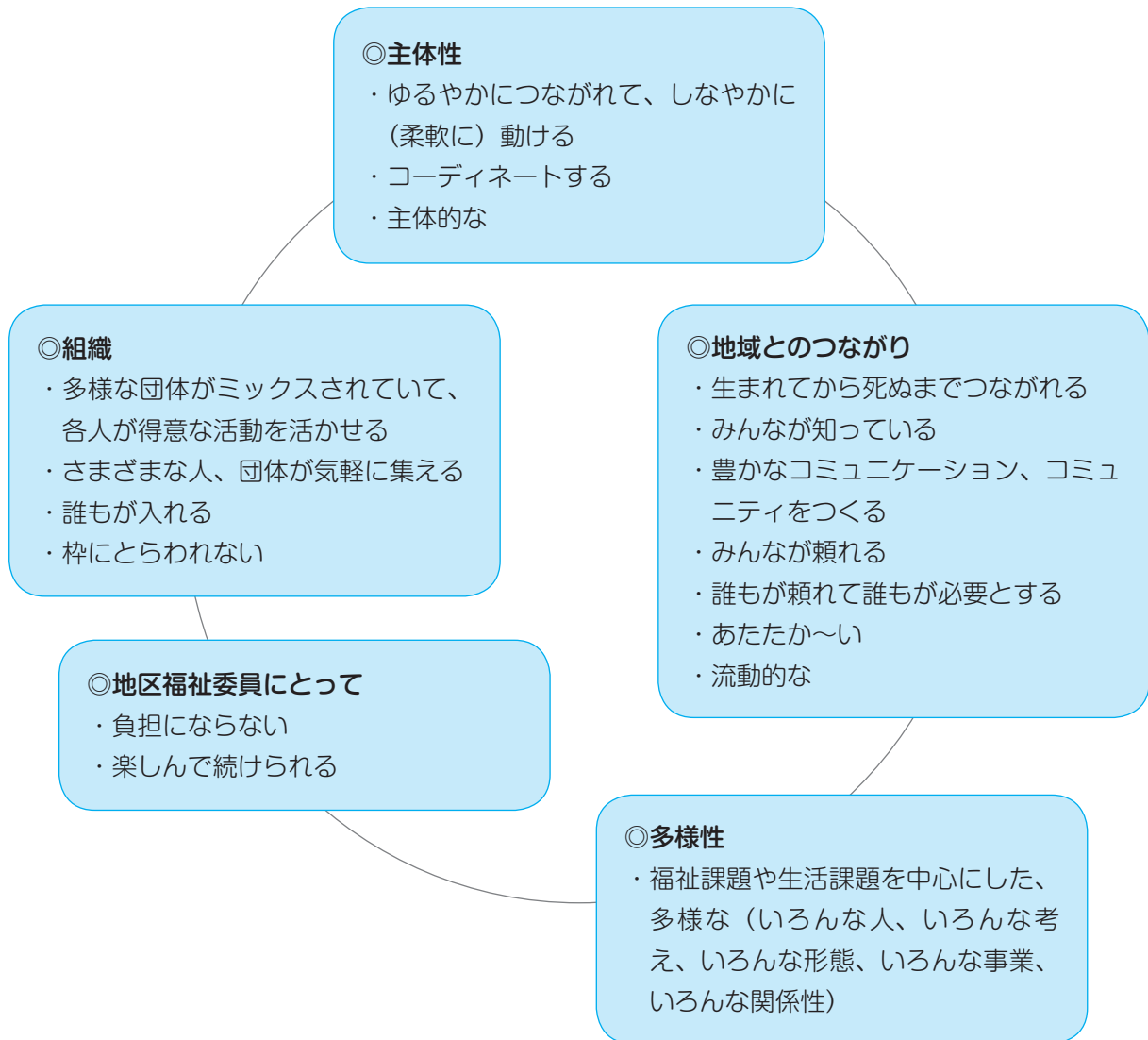
大阪府社協：片岡 哲司さん
『主体的な』

同志社大学大学院：山本 香織さん
『福祉課題・生活課題を
中心にした多様な』



大阪府立大学：小野 達也先生
『豊かなコミュニケーション、
コミュニティをつくる』

私は10年後、こんな地区福祉委員会であってほしい！！



可能性は無限大∞！！

資 料 編

- (1) 講義資料：これからの地域福祉と小地域活動（大阪府立大学 小野 達也氏）
- (2) 平成26年度 業務研究会 実施要項
- (3) 平成26年度 業務研究会 参加者名簿
- (4) 小地域ネットワーク活動リーダー研修会：活動分析シート

これからの地域福祉と小地域活動

大阪府立大学 小野達也

I. 地域福祉の動向 問題の状況

福祉が地域レベルまで来た 日本全体でも一斉権化の進行 中央 → 地方

2000年以降＝地域での課題と取り組みの期待

①さまざまな場面での排除－労働、社会保障、教育、家庭、地域社会…

その結果としての生活問題 → 2000年の報告

②社会から排除される人びとへの対応

CSW（コミュニティ・ソーシャルワーカー）の配置事業

地域包括支援センター

③そうした人々を支えるつながりをいかにつくるか → 2008年の報告「地域の支え合い」

住民と行政の協働

④地域包括ケアという考え方（2010）

2025年問題 医療と介護の有機的連携

⑤生活困窮者問題 生活支援戦略（2012－2013）

総合相談の体制づくり 第2のセーフティネット

2000年代の地域福祉関連の報告書

	年	タイトル	関係官庁
①	2000	「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書	厚生省
②	2008	これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書 「地域における「新たな支え合い」を求めて －住民と行政の協働による新しい福祉－」	厚生労働省
③	2009	新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書	総務省
④	2010	地域包括ケア研究会報告書	厚生労働省
⑤	2012 2013	生活支援戦略 中間まとめ 生活困窮者の生活支援のあり方に関する特別部会報告書	厚生労働省

特に、2025年問題への対応を意識する。

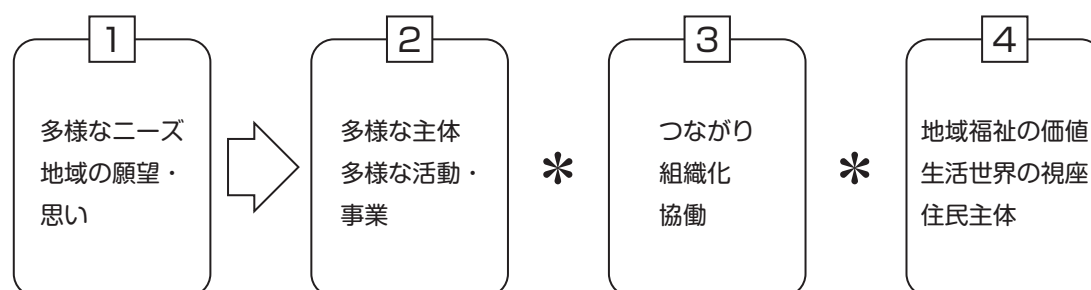
2025年までに、包摂的であつ、その人らしい生き方を実現できる地域福祉の構築

トップダウンではなく、住民の側から、その地域の特徴を生かしてつくる

プロセスゴールだけでなく、タスクゴールも強く意識する

たとえば5年の地域福祉計画であれば2回分で目標達成を目指す

II. 分権化時代の地域福祉の姿



- ① 地域では多様なニーズが生まれている。地域全体でどのようなニーズがあるのかを把握する。また、地域に住む人たちの様々な願望や思いもある。
- ② 多様な主体、多様な活動・事業
 現在は多様な主体が地域福祉実践に参入している。社協、住民、行政、社会福祉法人、NPO、ボランティア、企業等々。
 そうした主体が多様な活動・事業を展開している。ここには、ケアサービス、ボランティア、個別支援、制度内・制度外、フォーマル・インフォーマルの様々な内容が入る。
 こうした状況は分権化された社会の特徴である。
- ③ 地域の多様な主体、また、多様な活動・事業が個々に存在したり、単発で行われたりするのではなく、それにつながりをつくっていく。
 そこには、活動や事業などの機能的なつながりと、主体（組織、団体）と主体の実体的なつながりがある。個別支援と地域支援を結ぶことは機能的なつながりであり、そこで個別支援を行うワーカーとコミュニティワーカーが連携していくのは実体的なつながりである。
- ④ 上記のような活動・事業やそのつながりが、どのような考えで行われていくのかという点が、地域福祉の価値や生活世界の視座、住民主体である。

多様なニーズが基盤にあり、それに対して多様な主体による多様な活動・事業がある。その動きが単体でなくつながっていくことで相乗効果を生み、地域という次元に対応できる。また、その個々の動きやつながりが地域福祉の価値や生活世界の視座に立脚することで、分権化状況の地域福祉が構築される。

・そのために必要な力

地域のニーズを把握する力（地域全体のニーズの認識力）

団体や事業・活動を支援する力

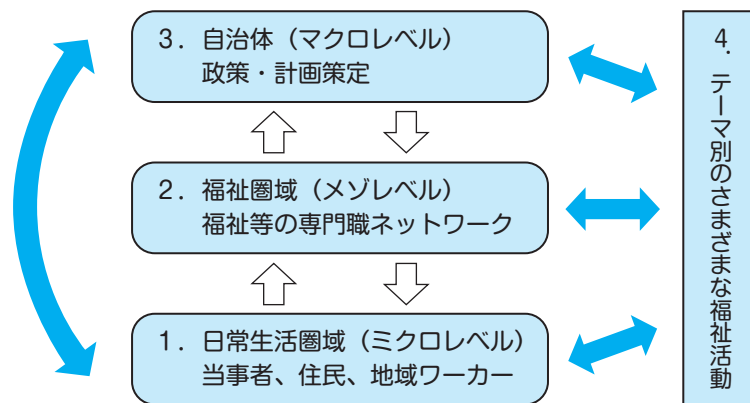
あらたな事業・活動を起こしていく力 自らが事業・活動を進めていく力

組織化する力

地域福祉の価値、住民目線、住民主体を共有し実現する力

こうしたことを可能にする組織のあり方をつくる力

Ⅲ. 地域福祉の全体像＝地域と福祉をつくる



(小野 140404)

地域を基盤とした3層 小学校区（人口1万人）をベースにして組み上げていく

1. 日常生活圏域（住民のメインフィールド）レベル 小学校区想定
住民が主に活動する場 校区福祉委員会（地区社協）
サロン活動、見守り活動、訪問活動等
時に、地域で働くワーカーとの協働 専門的対応が必要であれば専門職へ
2. 福祉圏域（専門職のネットワーク）レベル 中学校区＋α 想定
CSW、地域包括支援センター、子ども・障害関係の専門職、医療、教育、介護
専門職が配置されてそれぞれの問題の解決を行う
基本的にはチーム（ネットワーク）による解決＝専門職間のネットワークづくり
3. 自治体レベル
行政活動 公的な対応・保障の提供
住民活動や専門職の支援
地域福祉に関する政策、地域福祉計画の策定・実施
4. テーマ別の活動
ボランティアやNPO
地域を基盤にしないほうがより効果がある場合
自治体を超えるような課題

地域福祉の展開

- (1) まず、それぞれのレベルをしっかりとつくること
- (2) 横のつながり、協働を生み出すこと
- (3) 縦のつながり、要求活動、支援活動、を生み出すこと

平成26年度 業務研究会 実施要項

～小地域福祉活動の活性化から社協の総合力を「見える化」する～

1. 背景

- ・『大阪府内市町村社協発展強化指針』（H23年3月）で、社協の果たすべき役割や具体的発展強化の指針を示しており、その到達点を検証する必要がある。
- ・「平成26年度向けの予算対策」（H25年夏）において、市町村社協より

- * わかりやすい活動事例集を作成し、行政や議員に説明
- * 各市町村の取り組みをまとめ、府民やマスコミにPR
- * 実績を数値化／データ・事例の見せ方の工夫／実践プロセスをわかりやすく示す
- * 小地域ネットワークといきいきネットCSW（人件費に絡んで）の実績PR

といった声があがっている。

2. 目的

- ・「社協事業の到達点を検証」する（特に「小地域ネットワーク活動／地区福祉委員会」）。
- ・担当部署を越えた幅広い視点から作業し、「社協の総合力」をわかりやすく示す。

3. 期待される効果

- ・社協の総合力の「見える化」（市民目線／実績PR＋社協の到達目標／課題の明示）
- ・部署間連携の強化 ・社協職員の資質向上、研鑽

4. 検討項目（案）

- ★小地域ネットワーク活動の約20年間の歩み【事務局で整理予定】
- ★社協実践による地域の変化【協力してくれる社協（2カ所程度）にヒアリング等予定】

小地域福祉活動（小地域ネットワーク活動・地区福祉委員会）の活性化から社協の総合力を明らかにする（連携／経年での効果）

想定している中心課題

- ☆小地域ネットワーク活動の開拓的・先進的事例の分析
- ☆地区福祉委員会の協議体機能の強化（地区計画づくり、組織の広がり、等）
- ☆小地域ネットワーク活動の実績の集計の在り方（もっとPRする見せ方／調査）
- ☆「いきいきネット（CSW）」と小地域福祉活動との連携
 - ※地域と連携した「いきいきネットの事例分析及び成果（データ他）の見せ方」

参加者の人数やニーズが高ければ取り組みたい課題

- ☆多様な介護や生活支援ニーズへの対応（小地域福祉活動との関係）
 - （VC事業＋介護事業と小地域福祉活動との連携…総合的な実績の表し方、見せ方）
- ☆貸付事業や権利擁護事業と小地域福祉活動との連携…（同上） 等

※府社協で情報収集／分析作業を並行して行う（部署横断による）

※経年変化を図るために、協力してくれる社協へヒアリング（若手研究者＋希望する職員）

5. 参加対象 及び メンバー

府内市町村社協の校区担当職員を中心に、CSWやVC、貸付、権利擁護、地域包括等の各担当職員で小地域福祉活動との連携に関心をもつ職員（概ね3年以上）

+

学識者：小野達也 氏（大阪府立大学 人間社会学部社会福祉学科 准教授）

協 力：山本香織 氏（同志社大学大学院 社会学研究科社会福祉学専攻 博士後期課程）

6. 研究体制、すすめ方（案）

業務研究会	=	研究作業	+	調 査
・ 学識経験者による監修 ・ 社協メンバー ・ 若手研究者 ☆ 全体の方向性の確認		・ 社協職員中心 （人数に応じてG分けも） ☆ 協議研究の場合 ☆ ヒアリング内容の分析		・ 若手研究者の協力 ・ 希望者も参加可 ☆ 小ネット・地区のアンケート ☆ 社協ヒアリング（長期変化） ☆ 約20年の分析（事務局）

7. 実施期間（平成26年7月～27年3月）

おおむね、1～2か月に1回の頻度。

（イメージ）

- ① 監修の学識者が入る業務研究会（年3～4回程度）
- ② 職員中心の研究作業（年5～6回程度）
- ③ 調査（随時行う）

平成26年度 業務研究会 参加者名簿

【研究会メンバー】

	市町村名	氏名	社協経験年数	担当業務
1	豊中市	畑中 葉子	7年	CSW・ボランティアセンター
2	高槻市	中垣 充史	2年	地区福祉委員会、広報、共募
3	茨木市	佐藤 遼	3年7ヶ月	地区、障がい福祉サービス
4	箕面市	上田 健太	4年	地域担当
5	箕面市	山本 祐	3年	地域担当
6	寝屋川市	浅尾 和弘	6年	CSW・校区担当
7	交野市	今井 玲美	3年	小ネット、認知症サポーター育成事業、在宅福祉サービス、介護者（家族）の会
8	富田林市	小西 穰	6年	CSW、主福資金
9	大阪狭山市	阪本裕美子	3年	地区担当、民児協担当
10	羽曳野市	文珠 善之	5年	CSW
11	羽曳野市	野上 理紗	11年	CSW
12	岸和田市	高馬 瑤子	1年	地域担当、館管理、配食他

【アドバイザー】

13	学識者	小野 達也	大阪府立大学 人間社会学部社会福祉学科 准教授
14	協力	山本 香織	同志社大学大学院 社会学研究科社会福祉学専攻 博士後期課程

【実践報告者】

15	実践報告	佐伯 佳苗	吹田市社会福祉協議会
16	実践報告	平井 聡子	熊取町社会福祉協議会

【事務局】

片岡 哲司	大阪府社会福祉協議会
多田 健造	大阪府社会福祉協議会
藤井 美貴	大阪府社会福祉協議会

小地域ネットワーク活動リーダー研修会：活動分析シート

年 度	地 域	委 員 会 名 称	特 色 1	特 色 2	特 色 3
平成10年度	地域の实情にあった活動の紹介。地区福祉委員会が小地域ネットワーク活動の必要性をどう確認して、推進しているか？				
	豊中市	豊島地区社会福祉協議会	ひとり暮らし老人の会の組織化／調査	ボランティア部会による個別支援とケース検討会 (津委員会所、買物、話し相手／2か月に1回)	ボランティア相談窓口の設置 民生委員と福祉委員の見守りペア体制確立
	守口市	金田地区福祉委員会	個別支援ネットワーク(福祉委員、民生委員、他) 集合住宅での見守り(週2回／ドアの標識から通報)	地域リハビリ教室 (月1回／保健師との連携)	
	寝屋川市	北校区福祉委員会	しっかりとした組織構成(自治会単位の地区福祉委員会、 ネットワーク推進調整会議、ボランティア部会等)	重層的な見守り支援と困難ケース対応の調整会議	祭りや懇談会の実施等 (地域団体＋当事者組織＋ <u>中学生Vo</u>)
平成11年度	個別援助とグループ援助の連動性。当事者組織との関係。				
	高槻市	北大冠地区福祉委員会	ネットワーク委員を自治会から2～3名推薦。3年間で約80名の委員経験者。 <u>10年で隣組に1名</u> を目指す。	高齢者食事サービス(月1回) 高齢者40名対象。民生委員より呼びかけ。Vo 20名	いきいきサロン(月1回)ネットワーク委員が準備。 より小地域での展開。障がいや子育て中の母へ拡大を。
	堺 市	錦西校区福祉委員会	生きがいを持ってない高齢者の声がかっかけで、いきいきサ ロンを企画。回覧でボランティア募集(十数名参加)。	コーディネーターと相談し、 <u>来られない人を家庭訪問</u>	<u>PTA等と協力してVo体験してもらい、Vo増員(20～30 代の若い世代の参加を)。</u>
	寝屋川市	寝屋川市社会福祉協議会	<u>ひとり暮らし老人の会の会員拡大や会活動の活性化をめざし、校区福祉委員会と連携してミニサロンを開催</u> 。効果としては、福祉委員や民生委員、当事者の関係づくりができた。課題は、福祉委員主導で当事者が受身になってしまう。当事者組織としての活動をどうしていくか…。		
平成15年度					
	池田市	伏尾台地区福祉委員会	<u>「NPO・ハッピークラブ」</u> を立ち上げ。有償協力員派遣事業として。	地区福祉委員会のサービスのうち、事業化できるものを継続的、専門的に実施(街かどデイ、配食、移送)。	地区福祉委員会で介護予防に力を入れたい(将来展望)。
	寝屋川市	堀溝校区福祉委員会	<u>広報活動。校区のHP</u> を開設(毎月更新)。校区の活動紹介ビデオの作成。	見守り活動。高齢者向けサロン。子育て支援(わんぱくひろば)。 <u>難病の視覚障がい者に十数年の寄り添い支援</u> 。	広報部会とボランティア部会(20名)を組織。別途、サロン、見守り活動活動の実行委員会／担当者を編成。
	羽曳野市	高鷲北校区福祉委員会	<u>「ふれあいネット雅び」</u> …校区福祉委員会と、医療、介護専門職(在介等)、行政(高齢、保健C)、社協で構成。	登録型の「あんしんシステム」を導入。	地域と専門機関が連携し、素早くケース対応する。
	阪南市	箱作校区福祉委員会	<u>校区単位の活動計画づくり</u>	計画づくり、進捗管理にあわせて、住民モニター活動や、住民懇談会、アンケート等でニーズ把握を行う。	事業ごとにきめ細かい評価、目標設定を行っている。
平成16年度					
	豊中市	東豊台校区福祉委員会	<u>個別支援とプライバシー</u> (豊中市社協で「小ネットとプライバシー」の冊子作成)	見守り対象者の一覧表(年間／声掛け時に、元気○、注意△)を作成。	<u>ケース検討会</u> で、健康状態や家族友人との関係、サービス利用状況等を共有。
	茨木市	穂積地区福祉委員会	個別援助活動での、情報を扱う留意点(使用目的の限定)	<u>プライバシーを守るには、コミュニケーションが不可欠</u>	
	能勢町	久佐々地区福祉委員会	<u>障がい者</u> を含めたサロンづくり(<u>地元の施設、三恵園との連携</u>)	平成7年設立。先進地視察や福祉委員の学習活動を皮切りに、グループ援助活動を始めた。	平成10年から小ネットに取り組む。
	島本町	第三地区福祉委員会	<u>視覚障がい</u> のある方に、配食サービスを実施。	サロン参加も呼びかけ、点字の歌詞カードを用意するなど参加しやすい場づくり。	盲導犬も一緒にサロン活動に参加。盲導犬の啓発にもつながっている。
	枚方市	香陽校区福祉委員会	サロンの工夫(小学唱歌を歌う会)では、学校の音楽室で、 <u>地域の音楽ボランティア</u> も参加。 <u>小学生</u> も参加。	敬老の集いでは、子ども会や唱歌の会、ボランティア等が盛り上げる。	自治会館単位で、サロン活動を行う。
	大東市	三箇校区福祉委員会	毎月、サロンを実施。	三箇福祉ふれあいまつりを開催し、大成功。	ひとりじゃないよ心は青春を合言葉に、 <u>笑顔で楽しく、思い出づくりをすすめる</u> 。
	藤井寺市	藤井寺ブロック福祉委員会	<u>認知症</u> について理解を深める研修会の開催。	認知症の本人への生活支援と同時に、家族への支援(話を聞く時間を設ける、など心理的サポート等)。	
	富田林市	伏山台校区福祉委員会	<u>若い担い手</u> (小学校PTAやOBに声掛け)	「ママとキッズのおしゃべり場」を毎月実施。	校区福祉委員会の充実に向けて「 <u>アンケート調査</u> 」を実施。
	八尾市	曙川地区福祉委員会	<u>子育てサロン</u> を毎月実施。	<u>コミセン</u> を利用。 <u>保健師等の協力</u> も得る。	
	高石市	高石校区福祉委員会	<u>小学校の余裕教室</u> を校区福祉委員会の活動拠点に。	会議やサロン、他の行事等に活用し、会活動が活性化。	

年 度	地 域	委 員 会 名 称	特 色 1	特 色 2	特 色 3
平成16年度					
	阪南市	東鳥取校区福祉委員会	<u>校区での活動計画づくり</u> で、福祉委員の意識、地域を見つめる視点が変化した。	高齢中心から、子どもの見守りや、拠点を活用した相談窓口の設置に広がってきている。	「安心ダイヤル」活動を実施。日常の見守りから、行事への誘い、災害時対応等のランク分け。
平成17年度					
	岸和田市	葛城町福祉推進委員会（ゆう葛城）	推進委員30人。ゆうネット登録者105名	サロンで、おしゃべりランチ（8種類の弁当）、筋トレ教室、シネマサロン、パソコンカフェ、喫茶、他、ユニークな取組。	<u>ゆうゆうチケット</u> （協力回数5回で1枚…100円相当）を、サロン等で使えるようにしている。
	泉佐野市	末広地区福祉委員会	<u>子ども安全パトロール</u> の取組	児童への声掛け事件をきっかけに、PTAが週2日、福祉委員会と町会で週2日、シルバー人材が週1日対応。	小学生の登下校を見守っている。
	豊中市	野畑校区福祉委員会	<u>災害時を想定した救援訓練活動</u> （重度障がい者等を対象）	校区で責任者2名を選出し、災害時要支援者名簿（本人同意分）をそれぞれ保管。	市職員立ち合いのもと図上訓練。災害時要支援者を訪問する実地訓練も実施。
	茨木市	三島地区福祉委員会	<u>ワークショップ（4回）</u> で、地域のことをみんなで発見、共有。	<u>地域資源マップづくり</u> を行う。	ニーズと地域の人財（こんなことならできる、手伝える、等）をコーディネートしていく。
平成18年度					
	吹田市	五月が丘地区福祉委員会	運営委員会に 運営委員 （15名）。 7つの小委員会 （配食、茶話会、子育て…）を組織。委員会に 専門委員 配置。	福祉マップ探検隊、住民懇談会を運営委員会が開催。	毎年、活動重点項目に即した、丁寧な会議運営。
	東大阪市	長瀬東校区福祉委員会	自治会、子ども会、老人会、民生委員、保護司、防犯委員、青少年指導員、学校等幅広い組織構成。	<u>自治連合会だけでなく、公民館や学校との連携も重視。</u>	校区福祉委員会としての活動に各種団体からも協力するだけでなく、各種団体の行事等にも協力している。
	寝屋川市	北校区福祉委員会	ネットワーク推進調整会議 、土曜サロン部会、広報部会、 ボランティア部会 を構成。	校区でボランティア養成講座 を開催。懇談会や広報活動を丁寧に行っている。【1983年～の年表あり】	小学生向けの福祉マンガ「あたたか色の街が好き」を作成。障がいのある子どもとの交流も進める。
	枚方市	殿二校区福祉委員会	<u>自治会から「安心して暮らせる福祉のまちづくり」の要望が出され、S45年に福祉委員会が結成</u> された。	自治会を基盤に、各種地域団体で構成。商店主など男性の役員・委員参加率も高く、女性任せにしない。	校区5か年計画（18～22）で、安全安心地図の作成配布、青少年を守る会再結成、毎年度の見直しなどを行う。
	岸和田市	大芝地区福祉委員会	認知症の方の支援のため「福祉を考える会」を結成し、小ネット、配食等へ発展。	配食は対象者15名、最大週5回実施。 冬休みに子どもらも参加。	各町ごとのサロンや子育てサロン、世代間交流も盛ん。
	阪南市	福島校区福祉委員会	役所、社協、CSWが連携し、「くらしの安心ダイヤル活動」を展開。民生委員や福祉施設が連携・役割分担。	校区の事務局拠点（小学校に設置） から、電話での安否確認や校区活動が展開できている。	G援助活動で活動が活性化し、地域福祉推進計画でさらに加速。
	岬 町	淡輪地区福祉委員会	精神障がい者が集える場をめざし、100円喫茶（老人センター）からスタート。地区役員らと研修会を経て具体化。	共生型サロン では、 障がい者の軽就労体験、高齢者、子ども、障がい者の居場所に。	みんなのたまり場、多機能型活動拠点づくり。
	島本町	第四地区福祉委員会	子育てサロンを計画も場所選びが難航し、小学校が候補にあがり、 地域福祉計画で位置づけられて、実施へ。	小学校の学童保育室で子育てサロン を開始し、休み時間に 小学生との交流も増える。	学童保育室児童と地区福祉委員との間で交流会が実現。
	守口市	佐太地区福祉委員会	介護予防拠点整備事業を活用し、小学校の余裕教室を改修 して、さんあい広場「さた」を開設。	地区福祉委員会や婦人団体、地域の各種団体でさんあい実行委員会を組織。	調理室や食堂、畳間、園庭を活用して、給配食事業、喫茶、カラオケ、手芸、子育て支援、小学生等との交流実施。
	交野市	倉治小学校区福祉委員会	男性の参加が少なかったため「男性版いきいきサロン」を少人数6名からスタート。	「男の喫茶室」 が口コミで広がる。開始して2年？くらいで、参加者26名（スタッフ含む）に。	出会い交流がきっかけで、「男の居酒屋」、他のサロンとの合同行事、青パト巡回への参加等活動が広がっている。
	四條畷市	岡山地区福祉委員会	自治会単位の地区福祉委員会。自治会役員と民生委員、ボランティアで構成されている。	80代後半で頑固になってきて、家も散らかり放題、ヘルパーもコロコロ変わる。家族も家に近寄らない、といったひとり暮らし高齢者がいた。 地域で話し合い、傾聴を主にした話し相手ボランティアが家庭訪問。 次第に、高齢者も変化。	
	田尻町	田尻町地区福祉委員会	社協理事、評議員、婦人会、更生保護女性会等で構成。	縁日ごっこや縁日遊びなど、子育て支援センターや地域教育協議会との連携が盛ん。	給食サービスによる声かけ、見守りを積極的に行っている （給食ボランティアが支えている）。

年 度	地 域	委 員 会 名 称	特 色 1	特 色 2	特 色 3
平成20年度	公営集合住宅における要援護者の実体と具体的支援				
	吹田市	佐竹台地区福祉委員会	ニュータウン住民の高齢化、老朽化に伴う建て替えて、コミュニティの再構築が必要だった（背景）	高齢者や障がい者、外国籍住民など、コミュニティから孤立する人の地域でのつながりづくりを模索。	<u>アンケートを実施し、誰もが集えるサロンの開設、サロンへのCSWの定期巡回相談</u> 、等を実施。
	富田林市	清水町地区福祉委員会（府営清水町住宅）	独居高齢者の増加、建て替えと人口流入。	<u>アンケートから不安や困りごとを確認</u> し、「相談、安全、安心」のキーワードが確認された。	新旧住民が理解をふかめるきっかけ、システムづくりが必要。専門職による定期相談の開設が必要。
平成21年度	小地域での見守り体制の構築～認知症／障がい者の孤立防止を目指して～				
	池田市	石橋南地区福祉委員会	11部会が活動。男性料理教室や子育てサロン、小学生と地域住民によるふれあい給食などさまざまな活動。	<u>「花花部会」は障がい児者支援</u> を行っており、保護者との懇親会や行事交流支援（ボウリング、ミカン狩り、等）。	地区内の精神の授産施設や知的障がいの授産施設とも交流を持っている。
	岸和田市	新条地区福祉委員会	小ネット推進委員会を組織。町会や老人クラブ、民協、学校、婦人会、V等で24名で構成。	協力員のボランティアが80数名。要支援者400名弱を見守り。	<u>「リビングほしがおか」</u> を開設し、活動がさらに活性化。
平成22年度	小地域における子育て支援活動の意義				
	枚方市	東香里校区福祉委員会	子育てサロンは、平成17年より年6回（→現在、10回程度）、校区内3カ所で実施。	自治会館の活用により、 <u>より身近な小地域での開催</u> を実現している。	担い手は、福祉委員とボランティアグループ「たんぼぼ」。出会いがきっかけで、他の地域行事へのつながりも。
	柏原市	堅下中地区福祉委員会	<u>「ほのぼのかたしも」（社協が設置、地区福祉委員やVで運営。キッズフロアに会議室、屋外に足湯）が拠点に。</u>	ボランティアで、午前4人、午後4人で月～金まで運営。子育てサロンは、近隣地区も利用。各々、月1回の開催。	お寺を開放して、週2回、専門家が女性相談や子どもの発達相談にも対応してる地域もある。
	四條畷市	四條畷市民生委員児童委員協議会	民生委員78名。主任児童委員7名。報告者（民生委員）の担当地区は680世帯中、500世帯がマンション。	「こんにちは赤ちゃん事業」として、年間に20世帯前後の家庭を訪問。	<u>行政と連携し、フォローに努める。</u>
平成23年度	防災力と小地域ネットワーク活動				
	阪南市	波太校区福祉委員会	府営東鳥取石田住宅（1200戸）のみで構成。自治会、民生委員、ボランティア、老人クラブ、各棟役員で組織。	<u>全戸配布のアンケート調査でニーズ把握</u> 。ネットワーク台帳を発展させ、緊急時に備えた「ほっとカード」を作成。	独居高齢者をメインに、各種団体と協力してほっとカードの配布説明。市内全域に広まる。
平成24年度	生活支援サービスの開発／買物弱者を地域で支える				
	豊中市	府営桜塚住宅活性化プロジェクト委員会	自治会元役員や南桜塚校区福祉委員、民生委員でプロジェクト委員会立ち上げ（自治会では1年交代のため…）	<u>民間助成金（キリン、府）を活用して財源確保</u> 。100円カフェ、子ども向ゲーム、出張なんでも相談、 <u>出前市場</u> を同時開催。 <u>アンケート実施</u> 。重い荷物は「びーのびーの」メンバー（社会参加につまづきのある人たち）が運ぶ。	
平成25年度	拠点の活用				
	大東市	住道北地区福祉運営委員会	築55年の <u>五軒長屋の一角で「お茶のみ休憩所」を開設</u> 。運営委員会（福祉委員、民生委員、老人クラブ、自治会、ボランティア、 <u>介護者の会</u> で構成。週2日。気楽に語らう場。地域包括やCSWが来所して相談も。		地域福祉・子育て交付金「地域支え合い体制づくり事業」を活用して立ち上げた。
	松原市	恵我南地域福祉委員会	一津屋住宅（18棟532戸）で「 <u>ふれあいりびんく“ひまわり”</u> 」を開設。248戸が高齢者で、全戸の4分の1は独居。	<u>自治会で独居高齢者の調査を開始</u> 。元管理人室を「自由に集いおしゃべりする場に」と府の住宅まちづくり部に要望。	週3回の喫茶。自治会と福祉部、老人会で運営。スタッフ12名。 <u>看護師や包括、CSWも相談等で連携</u> 。
	岬 町	多奈川地区福祉委員会	平成22年から、 <u>学校の先生と地区福祉委員役員で勉強会</u> を実施（活動拠点を学校に、地域に開かれた学校に）。	学校行事に連動させて月1回、「 <u>喫茶めだか組</u> 」を開店。 <u>障がい施設と連携し、パン販売。出張相談も実施</u> 。	<u>「学校の中に地域を創る」</u> がコンセプト。徐々に回数も増やし、子どもや高齢者、障がい者がつながる場に発展。
平成26年度	地区福祉委員会と多様な団体との連携 ～参加者や担い手の広がりを目指して～				
	茨木市	玉櫛地区福祉委員会	当時、 <u>学校の空き教室が福祉委員会の活動拠点であった</u> 。昔遊び・見守り活動等を通じて、 <u>子どもたちとの関わりを大事にしてきた</u> 。	新1年生の子どもたちが学校生活に慣れるまでの1か月間、寄り添ってちょっと手を添える。 <u>できる人ができる時間帯だけでも関われる</u> 。	日常での声かけや、福祉委員会活動への理解の深まりなど、 <u>子ども・保護者・先生・地域住民の顔の見える関係づくりと活動の好循環をつくり出している</u> 。
	富田林市	不動ヶ丘町地区福祉委員会	高齢化率44.9%、男性の福祉委員が多く、地縁血縁が少ない地域。 <u>少子高齢化が進む町の課題についてのアンケート調査</u> を実施。	<u>不動ヶ丘町自治会と地区福祉委員会の支援を受けた任意団体として、買い物や移動等、日常生活支援を担う</u> “ほっとらいふ”を立ち上げ。	依頼の大半を占める <u>移送支援の実現にあたっては、行政としっかり事前調整を行い、モデル指定を受ける</u> など、意識的に連携をとっている。
	岸和田市	大宮地区福祉委員会	「地域に根差した施設として住民とより強い接点を持ちたい」福祉施設と、日頃の地域活動の中心である地区福祉委員会との出会いを社協がつなぐ。	住民に向けた <u>福祉教育の視点</u> を大切に、 <u>地域の親子を対象としたおやつづくり教室を実現</u> 。	<u>施設の利用者が先生役となり、本番のサポート役を福祉委員が担う。子育てサロンやご近所の親子など世代を超えて住民同士が知り合う場</u> となった。

平成26年度 業務研究会 報告書

小地域福祉活動の活性化から社協の総合力を「見える化」する

平成27年3月

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 地域福祉部

〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54

TEL : 06-6762-9473 FAX : 06-6762-9487

この報告書の作成には、共同募金配分金を活用しています